創刊大正十三年·通卷三百五十三号









Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.353



號月十



道 滿久良伎先生

義

遺伝

鉛筆を甜めぬ父…

111

柳

鑑

賞

幸福を 当世新

幸福に…

語太平記·

街の

ء ا

÷

號 昭和三十

一年

川大 を訪ねて 柳家 へ表題 伊志田孝三郎…… 伊志田孝三郎…… 道 ……米田三男之介 綠之助…(三三) 路郎…(三)

安川久留美…(吾) 路郎…(回 近 路 集画転 作 泥 柳 集 樽

私界 作 会から… 旬 望 導 … 戸田

小松園…(宝 雀郎…(四 古方…(ごろ 大八…(二 不朽洞 年婦 111 各 同 川不 一記念川 柳第二教 朽 地 舟 洞 柳 柳大会 近 句 帖 室 壇 詠 塔 ·三鴨 美笑選(三人) 麻生葭乃選…(三) 北川秦巢選…(1次) 不二田一三夫(三 路郎…((E)

呈賞 句評 費 H. * 川 拾 各題天位 不朽洞賞 円 雜 誌 * 北麻 社 路郎選天位に 川生 句 会 奢 路 巢郎

月

句

棚晒し」 新

博也選 路郎選

会

始末書

月 見

> 1 1

竹莊選 山選

+

社

市電下寺町日本橋三丁目下車)

場所

光明

下寺町二丁目市

バス停前

柳話

席題

三題

(当日発表)

兼題

任

麻生

本

B

時

十月七日

(H)



1日1~2錠で高血圧の苦し みを忘れるサービナ錠!成 分含量も多くてお得です

山之内



マートで のもい 着心地のもい 0.S.K. 是47200

談 窓

も云えることであろ く、街にならんだいろ 屋に限ったことではな ていない。これは八百 が、外見は殆んど変っ 変っているのであろう 罐詰類で、多少内容は 節々々の野菜や乾物や でならべているのは季 張り間口が二間ぐら 八百屋が今日でも、矢 に、間口二間ぐらいな 二十年も三十年も前 堂々たる店舗に改装さ 今まで小っぽけな店が 行や保険会社が建つ、 街を威圧するような銀

てあくせく してい かと思えば、あんなに が出来たのかと驚かさ れていて、いつの間 に、こんな銀行や店舗

ばそうでもない。 なに世の中と云うもの は変らないのかと云え はないかと思う。そん し発展してもいいので のであろうか。もう少 大きなビルが建つ、 前の姿を、何一つ見るで、二十年前、三十年 変貌していることもあ ことが出来ないように ずつ変化しているの 斯うして世の中は少し

るものだと思うが、八 くも根気よく作ってい 品は大した句ではなれては来るが、その作 百屋の例と同じよう い。あんな作品を、よ 作っている。多少知ら 思う。ある作家が句を うしたことは云えると 川柳の世界でも、斯

る。

り間口二間ぐらいの八 として、兎に角続いて いることに於て、矢張 るくなっているかは別 良くなっているか、悪 は少しずつ変化してい ているのである。 百屋的に柳界に存在し に、よく見れば、内容

ろへ来ているのであ と気のついた頃には既 認められているだろう 続けていたら、今頃は なことなら元の仕事を 訳ではない。これもダ に動きのとれないとこ しいことはない。こん て見ても、それも思わ メだと更に他に転業し 急に大きな店舗になる 屋に転業して見ても、 ないことはないが、何 業してしもう作家もい うと見切りをつけて**廃** 二間の作家でもなかろ 小さいながらも少しは 中にはいつまで間口

っていることもある。 たもなく消えてなくな 店舗が時代の波で跡か 堂々としていた会社や

とはのぞましいことで 行大会社の如くなるこ が、大きなビル、大銀 作家の誰も彼れも

品を 取揃え、それを を心がけ、5ちの八百 屋でなければ買えない では、しかも、その品 ような品を売ってるの よその店でも売ってる しなければならない。 その店の一つの誇りと よいから、その内容に 式の八百屋であっても とである。そこで、そ れらの作家は間口二間 はあるが、それは云う べくしてのぞめないこ

が陳い棚晒しのような ものばかりでは僅に店

るが、その作家の個性ば、いつも云う話であ そこには必ず中堅作家 を活かすことである。 とはないと思う。で これぐらいみじめなこ とになる。作家として 甲斐が感じられないこ り、それでは全く生き のに過ぎないことにな されるであろう。 から大家への道が約束 する品とは何かと云え は、自分の店の誇りと

洞 何 帖

麻

生

路

郎

台風が外れただけでも人間はほかんとす女が下車たので岩波文庫読む ボナンザグラムへ軽蔑の限をおくる

楢重もいた会友に君もなり 敷布一枚の上に太陽族の如く の草風すぎゆきて君は亡し 池田正三氏二科会友に強される 栗氏岳父の卧を悼む

逢曳へ背景も秋になっていた

社、明治三十六年七月三日 とく井上剣花坊先生(当時はしく井上剣花坊先生(当時はまだ秋剣と号していた)が入まだ秋剣と号していた)が入まだ秋剣と号していた)が入まだ秋剣と号していた。 と思う。 ういう当時に見てこれを起 いうことになるのではないか 用、そのことに当らしめたと としてでは まだ久良伎先生の頃 設けて以来と見られるので、 実に起っ を 題柳樽」の名にその明治三十六年七月一 尤も川 社員である先生のそ ていたか なく作者としてこ 柳欄担当者と 選者として は、 のようで 欄を

て乗り込んで来たとする古嶋

りであるこ

れを遮るものあればいさかかも正義派を以って任じ、

師本

しという

先生が、

7触れ込みをもっ社に際し「川柳の

で黙

にもかゝわらず、

一事の一文は

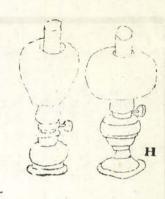
文は、そ

のまっ

のであった筈

な

てい



前表

まらぬ立場に置かれたのでは 時始めて先生は、川柳という いが、いすすし せしめる上に大きな損失をして、川柳の実体を一般に認識今返りみて、大切な時期に於 ことはいずれ改め 握ることをしなかったのは、 に相手をライ くも対抗意 柳革新を志しながら、 たため、 於ける剣花坊先生 からである。 かったろうか。 たように思われる。この 開始に前後 両者 識を生じ、 電報新聞 柳增 バル視して手を 因 0 間 が設けら H 4 て論じた には 0 本新聞 して行 12 同じく 新題 いう 柳塘 正い L n またこれを裏書し

0

それに代る人を求めつゝあ ら中止のやむなきに

前述

のような事情

いたり、

九

の藤井博士による

「文芸界」に中根香亭が「前 何等の言葉も行われていない 柳及び雑俳の歴史を弱表、川 りながらも「かゝる遊戯三昧 の小文芸は、後来終に再發の がなるべし、將たまた敢て がなるべし、将たまた敢て は、その当代に用なきを はで、その当代に用なきを この香油 とせ の年東京 がこゝに たかどうかを疑 以前に於て、 ことである。もし先生に早く 我が事としての関心 D の金潜 0 一つある。 志ありとす お明 先生に川 堂より發行 わしむる事実 治三十五 それにそ があ を問題 れば、

たということは、 るより他はない。 を許すところな 関 をそこに 5 柳に対す れなかっ か 考え 0

らの仕事として与えられるが、先生はこうして川柳を自れたものと見られるのである 聞 メとなり始めてそれは強めら 心 従って先生の、 」に於て柳壇を担当するハ はその以後、即ち 一柳 日本新

しても曾ては「況んや俳人の如き、俗悪近づく可からざる者」とまで罵り、短歌以外のが、当時にあってはその俳句が、当時にあってはその俳句のまた下位にあるかの如く世間的には見られていた川 柳に、斯くまで志を掛けるにいたったか、それを思う時、いたったか、それを思う時、いたったか、それを思う時、いたったか、それを思う時、いたったか、それを思う時、いたったか、それを思う時、いたったか、それを思う時、いたったか、それを思う時、いたったか、それを思う時、いたったが、先生は子規になってもないが、先生は子規になっている。 新にしたらい 生れのが て、 れが眼覚めを伝えている。 先て居らず」の文中にも、こ のこういう心 にあることをも らに子規によって しく、「 の育ちに 師長を以

革新運動をかえりょ、於ける、また短歌に於ける、 如き、俗悪近づく可からざるしても曾ては「況んや俳人のれたものと思われる。それにものと思われる。それにものというだった。

の記 V

る 述

対 年

ンゼンは世界的常識!

- 生々した男性美をつくる 1
- 爽快でヒゲソリがたのしい
- 新强力殺菌剤G11配合で-層强カノ

桃 谷門順 天 館

書は その 向うべ 一に脱ける かしき何もの 革新 そう考え れるも という 動に 台

である れるのである。 の中に、その覚悟の程も思 対する卒然とした傾倒ぶ が、こういう先生の川

競見することを怠らなかった 規がそこに立って自らの道を 川柳を以って江戸人の趣味的たかのようであった。先生が こゝに溺れ出ずることを忘れ 成果ではあったが、しかし子 ち古川柳の研究に努力を傾け 類」の大事業を完成したのに 典をひろく渉猟、「俳句分 ず自らの俳句観を確立すべ あるこというまでもないが、 学ぶところ尠くなかった。当 その方法もまた子規のそれに れの目的であるかの如く断じ く、その基本としてこれが古 子規が俳句革新を志すや、先 ける月並排撃に倣ったもので ぬことは、先生自らも、門下 のに反し、惜しいかな先生は 偏狭にそのことが窺われ 産であるとし、美のみがそ の感化に負うところ尠から 旗印としたのは、子規に於 狂句打倒を以ってこの運動 序文中に記されているが、 井卯木著の「川柳江戸砂子」 「川柳硬概」の著はその 先生も運動開始に先立 中略

戸詩であるから、今後とい 生れ、江戸に育った純粋の 先生に従えば、川柳は江

かった。これは先生がその好 きを古川柳から聞こうとしな

6 子にして名ある者、榎本あ年十二月發行――は「江戸ツ柳」誌第二号――明治三十八 り江戸ッ子にあらずと、---言はん、阪井は久良岐郡あ 良岐ありと言はば人は笑うて 剣花坊先生の主宰された「川 た。へこういう先生に対し、 学に参するの資格なしとされ えども 持ち得ぬ田舎漢は、この文 大島あり、而して茲に久 文学であ 戸を離れては成りた る。従って江戸 (気分)を自ら

振回す点に於て江戸ツ子より称して常に口癖に江戸ツ子を なかったのは、先生に於ける ところにある。しかも先生が 本質をいうにははなはだ遠い好尙に偏するもので、川柳の う)この川柳觀は勿論先生の を強調されていたかゞ知れよ も当時いかに先生がこのこと って酬いている。これを見て なる哉しという柳楡の文をも 以上の勇気あるを知るべし剛い所あり、確かに江戸ッ子 柳の受取り方に何か性急な 柳をこゝに置いて疑うこと のがあったのではないかと アー久良岐氏は江戸ッ子 を、

果ともいえよう。 尚に於てのみ川柳に対した**結**

を急ぐ、その気持がこれが開た想像されて来る。いわば功 そういう先生によってこの事 こういう読みの浅さを、 結果としてこういう川柳觀 安易を先生に選らばせ、その 好尙に於てこれを受取らせる ぐりをさまたげ、 始に当っての先生に果してな 業が、多分かなりの焦りをも る。そう思うと、先生の川柳 革新運動の開始に当って、 すところあったとしたなら、 ったものと思われる。 古川柳に対する先生の深いさ かったろうか。この焦躁が、 って行われただろうこともま たかも、自らそこに額かれ、 して見せはしなかった筈であ れるように早くより川柳に志 に対する関心のいつ頃に生ま 先生にしてもし従来伝えら 先生に抱かしめるにいた 先生自身の

一自ら江戸ッ子なりと

り返ることによって、この小う道をたどったか、それを振先生の川柳が、その後どうい ものか、幸に諸君の頷きを得 ことによって、改めて眺め 稿が何を訴えようとしている 直して見た。こゝに出發した 觀の育ちを、その伝をたゞす する久良伎先生に於ての川柳 以上私は川柳革新運動に前後

感じられる。

即ち先生は、

面的生活にのみ興味を

8

め

大 Л 兄

本誌上に「人間横丁」をこんき 安 III 久 留 美

よくかき続けられている東野大八

をよみ、何かかきたくなり、新聞 渡り鳥のようにつづけた。 かすことにした。 記者特有の4B(エンピツ)を動 らしい。私もこの職は約八年ほど さん(未見の川柳人)は新聞記者 現在の私は手に不自由はなく原 -さて「親の感慨」という一章

さである。 の度がすぎた天ばつで脚はリッ ったが杖なくては動けない浅猿し な片輪であり松葉杖にこそ縁を切 はかけるが十数年前アルコー

もなかった。つまりこれもアルコ 婆にやる謝礼は素よりムッキ干す 正十年一月末は貧乏のドン底で産 い名を命けた。この子の生れた大 十六才、(郷子)というむづかし 才から四十一才までに三人の子を ール過ぎての罰てき面であった。 この世にこしらえた長女はいま三 私はこの不具者にならない三十 (当時十五銭位)を買ら余裕

> 重いし睾丸が黒いから生長々々 んの日だったが産婆曰く「目方も として祝盃をあげた。それが寒い のところ女より男の産れる事は父 生れたのはナント嬉しい男の子 とよみ、この娘八才を迎えた春妻 それでものびて一年坊になった当 (や」貧乏らすらぐ)やはり真実 〈 北国の二月十五日、釈迦ねは、 腹は再び狸のアメ細工となり、 (私は北陸毎日新聞記者時代) 鉛筆をなめる 子供になりました

原稿紙平二と こそは書かれたり

半ばに

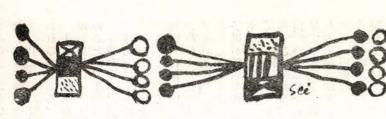
の「平11」 150

路郎氏がその二月

と自分が産んだ子供のように喜ん

次がいま生きている次男

研究する日があるでしょう。 0 墓になったあとで川柳をなる程と い出。平二は川柳の て下さったのも二十五年 美二世」ともならないが、私 いいろの短冊をわざく 趣味なく「久 前の思





大阪市 中 島 生 庵

納棺と言うのに家風のぎこちなさ 打水をして待つ客の遅い事 Mの死を悼む 祈杏園老師御全快

特急を迎えに来たか女將連 中尊寺栄華は続かぬものと知る

兵庫県

戶

倉

普

天

八十とは見えず妾と生きて居り

大阪市

ili 場

没

食

子

寝ころべば宿題の子も来てころび 慎太郎刈に電車で足踏まれ 万年床その上蚊張も吊ったまゝ 運転手酔うてる客におどかされ 治大正の夢をアバンがいまも追う

內 膝 草 郎 浴衣サービスなどとアルサロ夏の陣

病人の浴衣たゝんで置いてあり

それんでに子も学生で印を持ち

普通なら銀婚なのに二号の身

アプレ派にまかせば国も売りかねじ

ヤリングはずして仲居さんになり

親切を嫉かれ付添い又替り 東京都 Ė

田

好ましくない映画とか僕も見よ 諺の通りか薬屋御増築 はげちよろのルーデュのあくび味気なし

両替の客にも扇風機は廻り 米子市 Ξ 鸭

美

笑

父ちやんのお家造ってやる積木

奥様がお迎えですと妓が起こし お向いへ大の留守番まで頼み

ホノルル市 前 山 北

海

銀行のマッチをでんと応接間 自信過多我が失敗につき經 五十過ぎ又やり直す荷を纏め

次男から小遣届く父となり 大阪市 Œ 本

露のみち蟹の親子の通る径 水 客

この町の平和な音にかき氷 坐禅やってることさえ皆んなに馬鹿にされ 雷も楽しきものに山の線 山の寺ちようどよい時しぐれてき カナーへの高さ見上げる蔭があり 打水にはんぶん二階の灯がうつり お慕みな海に向いてるとこに住み 達者なうちに行っとかなあと出好きなり 生ビール壁に向って一人いる おしぼりへ寝不足の眼を閉じて開け

不 しをり戸を開けたら萩がこぼれそう 風鈴を団扇の先で鳴らして見 みなぬかのあかしへ虫がつき当り

大阪市

丸

尾

潮

花

肩先の情を男は見逃さす 爪弾きになるころ酒はさめかゝり 直門と言うをやたらに売り歩き 右向けば左のひとの気にいらず 貴洲さんへ

母の燈へ影をつくった舞い扇

大阪市

Ш

春

巢

風通しほめて二階で寝てござる ナイターへ逃げても社長呼出され 当用漢字さすがの父もかぶと脱ぎ 行水の水真っ黒で子は達者

高校野球かけっぱなしで暑いこと

奈良県

尾

崎

方

Œ

夏厳しどこで着るのか上衣提げ 汗々々それでも登山致します

素通りをして飲み仲間行ってくれ 百ケ日などと禁酒はからかわれ 墓掃除しやべらないから早くすみ 岡山県 H 久 米

飲むことを知ってる女承知せず

大阪市

香

林

世渡りの上手過ぎても恐わがられ 汗をすることも知らずに廻り椅子 早起へよしきたと蚊が待ちかまえ 剃双と云われて敵も少し出来 番附の最後わが名の淋しけれ

親切にされたも親の光るうち



お婆ちやんのネゴトは怪談じみてくる 冷房を出て冷房を呪うなり 逃げもかくれもせんけど払わない 女房の嘘は寝る前迄にばれ 出雲市 大阪市 尼 木 F 图 E. 見返してやる日はついに来ずに老け デカい判出来たに椅子が未だ空かず 夜を稼ぐ妻を見送る淋しい日 京都府

緑 之

助 テレビの野球が惜しいとこで切 二次会へ義足の社員ほっとかれ 大阪市 松 九 ŽI.

驻 赤電話誰憚らずあまえてゐ

ミス○○ミス××昭和の御世に生きる身の

沢

史

薬

生活苦銀婚式も知らずすみ

カツターを揃え高校生よぎる 五〇号蟻の塔にも似て強き

大阪市

水

谷

竹

僚誌「むらくも」

兵庫県 西 鬼

優勝に応えん肚を練り直し 路郎先生より入選通知を戴く

特急には勝てず急行駅に待ち 尼崎市 11 林 文

バスガールマイクで虫歯かくして居 タイト服大皺見せてバスを降り

役僧のニキビ青春押えかね 大阪市 富

岡

淡

舟

夏休み父の昼寝の場所もなく 中元の西瓜は門で鉢合せ

奈良県

飯

降

H

香

蟬の声山間の昼は音もなく 夕焼へ四十女の夢はふえ わびしさは猫と二人の影法師

映画など見た事もなし田草取る 奈良県 西 辻

防府市 長 野 竹 井 青 蛙

御見舞のソフトが半分とけてい

踏まれても謝まっとけばよい飛田

名刑事喚めきたいだけ喚めかせて 宿題を山ほど出して教師避暑 岡山県 直原

月 夕立の様に襲うて来たキッス スクリーンが明るくなれば他人めき 恋も金金に恋人さらわれて

無器用か知らんが恋の手早やさよ 去る者は追わず四人目を迎え 夫婦とは名のみ斗病士五年

大阪市 西 森 花

村

順番で死なぬ生命の怖しさ

平凡を愛すと言わず時の人 独り者今日も暮れるか胡爪もみ 鳥取市 河 村 H 満

誌代切れこの柳友も貧しらし 明治維新の例あり若さあなどるな 社の人事異動を新聞記事で知り 岡山県 福 島 鉄

葬式の段取りもして家を出る 長女阪大にて心臓手術

児

プラットへのさばる天地無用なり

岡山市 服 部 + 九

平

間

嶋

青

丹

子

t 面 山

前任者飲み助だった話聞く 病人の指示で貯金を払出し 呂銭と別にパチンコ代が要り

大阪市 Ш 本 棐 光

我が家に帰えり暑さを脱ぎ散らし 倦怠期別々に寝る部屋はなし

倉敷市 村 T 容

はじらいと色気が少し欲しい秘書 御寮人淋しく家憲まもりぬき 母のいぬ園児しよんばり戻って来 オートメイション汗の尊き知らんでしよ

市場籠話がつきてたゞ歩き 手土産の中味をあてる子にあわて お目見得に来た娘の母の饒舌な 石川県 光 郎

官物のカメラを提げて家族連れ 若 林

草 有

拔いていた白髪も今はなでられる 同権は縁台にまで脛を出し

うわごとと知っても母は返事をし 大阪市 足 立. 春

高知市 西

迷

窓

金少し蓄り浮気がしたくなり

梅

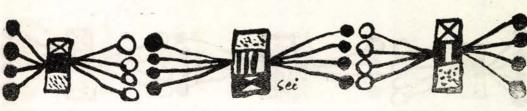
里

下関市 石 111 侃 流 洞

ライバルの人気へ少しノイロー たゞ酒へ大きなホラを吹いて去に 監督の監督がいる草野球 ハイヒール歩道の砂利がにくらし

山 田 季 蓉

広島県



文字あっての書道であるに前衛派 立話蚊が来る脛を足踏みし 野

たいがいにしたらと電話切られたり 団体で禿げているのがガイド役 困りごとなら本署に来いと云う 匹の鯛をこんなにつつき合い

市 木 摩 天

郎

年頃を持って月日の早いこと 父まさばまさばと思うた左り前 愛し得て添える二人になるもよし

税務署の道順あごで教えられ 高槻市 福 T 路

落選の上に逮捕で名を知られ 似合うとは義理にも云えず生地をはめ 弱点を握れば握り返される

けったいな男になびく羽目となり ボントへに嫁はんがあり髭があ 貸す金が無いと無情の風が吹き b

久しぶり訪えば妻君変えていた 呼鈴を押したら内から呶鳴られた 金切声あれじや夫君も痩せる筈 扇風機買おかと言えば阿呆らしい おめかけかそれでぶっつり来なくなり

私の立場が立場がとこうるさし 自転車にも乗れぬ養子を自慢にし 倉敷市 原

流行に通じ台所手伝わず

E" アンケート不理な意見はひかえとき ンボケのまゝ停年をむかえたり

> あおぐにも師匠団扇をばちのよう 趣味の無いやもめ暮しの不憫なる 湯上りへ六尺締めてすがすがし

味

平

木の香り充ちて明日への希望湧き 祝 新築移転

信心のない仏壇に本を積み

パタパタのくせに日蔭へ日蔭へ来

倉敷市

藤

井

春

H

別れてもいゝわと女あわてない

目ざわりな所へ古い貯金箱

親は易者俺は師匠とどこやら 孫来たる足相撲なと教えよう

似

アロハ着てズボンの古いのが目

立ち

病院の隅こに割れた植木鉢

避暑の客ちらほら見えて鮎肥り

国の母来でヒステリーちと治り 旅行中妻は携帯品にされ

在分に興奮させて逃げられる

売春法フ、ンと嗤うのも交り 大阪市

金 俗用の鞄は裂ける程につめ へ嫁ぐそうな女は痩せて居る

蓄 米を担ぐ筋骨たくましや

貧乏くじ引いた英霊苔が生 え

テレビ今零対零の生ビール 京都市 松 III

杜

的

谷

水

夕立ヘダリヤの支柱確める 金魚鉢蟹だけ残った新学期 大阪市 佐.

工場見学思いがけない娘に呼ば

思うまゝ個性のばしてくびになり 社内結婚今度は夫婦善哉に 観潮へ持参のウイスキー空ける

善

二級酒をのめば二級酒づれが出来 大阪市

梅

志

岡山県 岡 田 夜 潮

岡山県 本 田 恵

朗

鍋 mil. 故里へ帰る化粧は薄く塗り 初恋が社長の二号になって居た

ちとどうかしていらっしやる化粧振 バンガロー テストする方の常識欠けていた 太陽族は悪びれず 岡山市 津 田 麦

> 太 楼

平巡査なるかな美談大きく出 アベックへ線路工夫の即興詩

正々堂々戦いました苦笑い リベートも汚職も知らず蠅たっき

米子市 小 四 雄

手切金めあての子供生むと云う さん付けに変る離婚の判を押し

告白をするなと女医にいたわられ

野

自

水

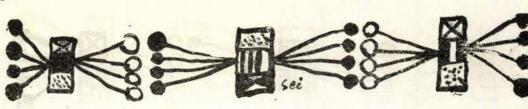
吹田市 橋 本

*

盆踊り寝ている筈の患者いず 桃色のハンカチもあり婦長部屋

त्तां 高 临 雄 声

鵜匠にも似たる女房の網さばき 三人が仲よく暮すむつかしさ 大掃除恥かしからぬ青畳



気まぐれに靴を磨けばどうしたん うちの女房香水なんか知らぬらし 先生と言われて何んやわいかいな 上手やと褒めれば昔塚ガール 切手も貼らずに暑中御見舞 電話ひいたらしいお隣の儲けよう 離婚だっかと代書無表情 安が勝ったと昼寝起される

島根県 非 明 剆

台風の街一団の通勤者 秋だなあ娘の嫁入りに稲実る

財閥のような顔してハイヤおり 親のない子がハーモニカ手離さず 逢引の目には入らぬ月見草 支那そば屋一旗あげる人に見え ふんどしで涼めば女に羨まれ 岡山県 永 松 東 岸 子.

見送っているに振返ってもくれず 当事者でないから勝手なことが言え アベックの友へさっさと消えてやり 倉敷市 大阪市 野 Щ H JII 素 Bn 身 郎

掃除がえろうまっしやろ女同志 生々庵の新居に招かれて

茶

天皇へ力士裸で一礼し 初恋もなく大学で首席なり 酒供養おんなじ顔が又揃い まし甲斐があるわと奥さんにもて

ーナスが出たなと子供にもわかり 水

志 来客とさとり税吏もすいを見せ 浮気してみなはれと女將真面目なり 忙しくなれば職工おだてられ 子無しならさぞおこるらむし

本

外

久

よちし、の孫に一家がくたびれる 盆の墓御きげんさんの顔が合い 極道の顔も見えてる盆の墓 ふところも知らんと妓寄ってくる 大阪市 達

大阪市

村

+

悟

裂いて焼く鰻見てても始まらず 雑魚寝から女一生あやまらせ

堰

7

大阪市

不二

田

一三夫

PTA出る日社説へ目を通し 雀フトわが巣じやないかとパーマ見る 酔うほどに妓おさおさ油断せず サジを投げたい気持ちころして美容師が 金詰りウチもやっぱりそうしとく しくしくと明治の女は泣いたそな 万円札が出来たらさみしかろ んみつで近づき酒で籠絡し 井 7 か

トマトトマト御飯の足しにとは淋し 涼風へ固い鼻緒も快ろよく 噴水は彼女が飲んだ後で飲み お洗濯桃が流れて来そうなり 台風もいいねとすねた事を云い エテ公に兄ちやん云われそうな僕 太平洋向けば帽子を飛ばされる 秋だなと窓から煙草吹かして居 茶漬がいいよと料理手も付けず

> 洗濯は矢張り彼女がするキャンプ お父ちやんこれ着なさいとアロハシャ おあそびにいらっしやいよと未亡人 深 見 雅 "

堂

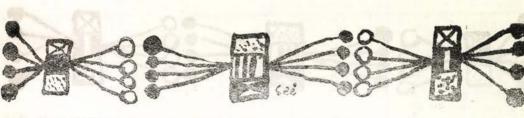
喧嘩するさくらも居るとは知らなんだ インテリの無力を知った大掃除 薄給という名が似合う下駄で出る ジャンパーを着て丼池の社長はん 下っ端の異動は有無を言わさぬ気

サングラス車内を泳ぐ様にゆき 大ジョッキの前で負けてる小ジョッキ パラソルをひろげて見せて昨年のよ 片思い祝電打とうか打とまいか まな板の西瓜の端をとる内気 級長を母親がしてる様きこえ さめんしと人形を泣かす文五郎 太陽の真下で暇な靴みがき 八形ケースの中でお梶が陽やけして 神戸市 初 甫

平 Vその訳も知らず署名をして通り 露骨では怒り皮肉では効かず 新教へ傾く程に病み続け **葬式のかけもちで市議顔を売り** 呑む時の世話が上手で委員長 牽制の家出と親が折れて来ず 縁は異なものちと足らぬのへ足らぬ いゝ人があるとも言えず見合に来 伝票を飛ばし首振る扇風機 大阪市 井 文 秋

起されにや起きない癖が釣にや起き 岡山県 池 古

C



売名が趣味の様なる趣味に凝り

東京都 石 居 高

仲居みな独り身と云う素振する 7 ベッ 2 のが 1 トを先でよけて呉れ

岡山市 士: 井 雷

子を叱る父に解析手がつかず

お多福に似た嫁が来て運が向き 大阪府 清

ボ 乃木さんを知らぬ教育あきたらず 見せようと子と待てば貨車ばかり来る ナンザグラム先生知恵ためさ 生

色事の悩みを食えぬ易者聞く 諍うた夫婦へ帰る家ひとつ 姑論裏付けるよう離縁され

男ばかりでごみ箱にごみふえず 染めてるを知らずに髪をほめられる 神様の前で賽銭貸せという

妻よりも先に死にたし愛しいて うしろ振り返りもせずに見舞去ぬ 夫婦とも操縦してるつもりで居

大阪市 武 部 若

菜

冷房が足にからんだ通り筋 意出頭 太郎刈りで青春うすよごれ 一過お茄子申訳のないきりよう 肩書が一つふえ

稽古台にされて帰った坊主刈 本妻の強 味は地 味な柄を着る ilī

圭

水

淡 パ

金のある顔でつかっている温泉 暑がりが上 司の扇風機横目で見 石川県 松

恒

雄

Ш 志 **感違いした役人へ逆らわず** お負けして売らねば今日の飯食えず 働いた足を揉み揉み明日へ寝る 一転手短気な顔をしてござり 花火勿体なしと見る暮し

東大を受けた落第自慢にし 苦しさにせめて呻いて気を晴ら 念仏で嫁の仕草へ我慢する 海水浴よりも昼寝が年に合い

見

人増えたお刺身盛り直し

いでズボン捲って社の野球 高知県 建 沼

康

之

介

恋人もなしニンニクを喰うて臥る 男には負けぬ黒さで桑を摘む アラばかり目につく恋の下り坂 仁術は二の次医師の野球好き 応接間俺もこんなの建てゝやろ

洗う谷に水なしよい天気

H

照

性格が違い弟よく儲け 鉄橋の此所から故郷の風を吸 滋賀県

宿命の 結局は夜店を拔けて飲んで来る 大安へ母も同意をして手術 馬も働く朝を行く

欺された通り頭末書書かされる

ŀ なと 別居なさいと医者が言い 1 大きな欠伸で夜が明ける 大阪市 児 島 J.

呂

志

あ

母ちやんの素顔ドライヤの中で酔 岡山県 野 2 П 美

舟

窮状は

話

子供まであいそつかした母のヒス

中 島 可 +

日本語があるのに英語入れ別荘で太陽族の子に育て 洗濯機或日おむつに腹を立て 楽譜など読める娘で嫁き遅れ たが

地価暴騰知らず雑草伸びに伸び

はやりです出来損いと違います改組して次男が専務取締 わよくば金的 射る気女事務 今治市 野

卒であるとは見えぬ自家用車

文

庫

奥さんの期待外した通信簿 産見舞子無しは手持無沙汰 人も国も垣をするのが好きらし す君より 僕の方 大洲市 なり 米 V 沢 暁

明

同 近 詠

XX

 $\times \times$

交番で水をよばれる程に酔 いやらしい男親切やゝ過剰 料を集めに猿の綱のばし क्ति

Ti.

健

涼み台の下へ横遺い脚早し 瓜くうに人間らしい歯の白さ 金沢市 安 III 久

留

美

何の為に買うたか判らない二日 たゞ一尾鰌が土にはねている 老眼で近よるトマト柿のいろ 醉

戦後派の強 膝詰をしても女の巻たばこ 長野県 高 峰 柳

児

重役はすぐに赤鉛筆握り酔って居る妓に握手強られる 余生たゞ淋しく家庭療法で逝 身は金を握って居 つけり

すきな娘の水着姿も撮っておき 和歌山市 秋 1 宏 力

席におよんだが、しばらく神妙に 上役が彼を呼んで意見した。 当れば飲み、シケれば借りるので して後、彼は答えた。 じまってその人得意の処世論の一 科通い。みかねたか或日、年輩の いつもビービー、最近ではその暮 とりつかれた若いのが社にいる。 姿は競輪場へ、というトバク性に 「いく加減にせんかね」からは にオカシナ病気まで背負って外 立てばパチンコ坐れば麻雀歩く

りませんよ」 いくですか、決して太陽族ではあ だ当年二十一ですからな。しかし デカタンスの果できっと私はいく い、これも長い人生の経験です。 労人になるでしょうよ。私はま 「やるだけやらしといて下

付で私にいった。 なでながら、さも安心した様な顔 その上役氏、後で白いびん髪を 最後の太陽族云々が気に入っ

ボナンザグラム

やボナンザグラムブームである。 そして宝くじのチラシまで、いま 新聞、週刊誌、ラジオから広告

おかげで出入りの本屋 期のベストセ さん ラ 1 V to

が有難いです、一冊三十円で二日 釈は至極さっぱりしている。 共通点がある、なんてこじつけた のもいるが、さる奥言まはこの解 がこのおかしなクイズもこれへの 永久性は一種の性的魅力なんだ スコミに他ならない。パチンコの 売れること、売れること、これは 答やらヒントを載せはじめたので 当用漢字の手引ルです」 一種の新聞社の枡混み、つまりマ 「主人ときたらムダ使いせんの ある地元の日刊紙では、この

もちますからね」

慎太郎刈り

かみをなびかせただけでそれ 秋の河原のヨモギみたいに、一つ 方は慎太郎刈り、頭のテッペンに です、お蔭でパーマのカマは空っ りと申しまして、髪のブッタ切り ぼです。そうかと思うと男さんの 申しますならば、さきに流行った をケイベッしています。なぜかと ヘップバーン刈りは、一名乞食刈 いまの流行はすべて、理容美容界 ある美容師会での席上の話。

しまい、ボ 令や丸刈りよりはましですがね」 ませんです。 マードもコテ代も浮き 戦時中のパーマ禁止

映倫引用

く真剣な顔をして現われた。会っ が重々しく云った。 てみると、その中の代表格の一人 社に御年輩の客が二、三人ひど

文句を使らんで困るんですよ、富 ネジですよ」 のでやめろ、といったら、何もエ きよせ豆畑川というヤッをやった はないのですが、この間、川盆の 踊るんですが、その音頭とりに富 マメというからじゃろう、とサ 中文句じゃない、エロと思うのは ので、これでは風紀上面白くない 十六日ヤミならよかろ、お手々ひ 題になっていますね、それほどで 山八尾のおわら節はエロ文句で問 山の人がいましてな、ひどいエロ カ

からなし れの人が厳シュクな顔でいわく。 盆踊り歌禁止の世論を起して貰い にして結構ですから、エロ文句のそこで新聞で、私の村をモデル たいというわけである、そして連 映画にだって映倫がらります

七八の抵抗

食わんと、元代議 上げたが、この橋の作り方が気に かけ、日本一の近代的な橋を作り が出来て目下大モメという事件 朽したというので、工費大億円も ある。今から六年前、長良橋が老 いたが、岐阜の長良川に二つの話 文芸春秋で大宅壮一氏も書 士の平野増吉氏 いて かる

「お盆で、村中の人達 が踊 りを

ぐれん隊

こんな具合だから、やくざやぐれ る露天組合の大親分いわく「ぎょ のやくざは東京より真ものです 全くヨソの国の話。顔なじみのさ だからぐれん隊粛正なんてことは る。一昨年千五十年記念ウ銅をや というところはまことに古風であ 太陽族など入りこむ余地もない。 った金看板のアユ猟をはじめ、知 この長良橋事件をふくめて岐阜

らが、橋のたもとにいるのを幸 てテコでも動かない、紛争かくて い、近所の十軒ちまりとガン張っ 二年越、おかげで市民たちは、バ が私に語っていう。 慨嘆してか、岐阜のさるインテリ ん隊征伐は、岐阜の人間すべてを 一切否定することになる。これを

りとした新橋を横目に、通るたび 「やくざやぐれん隊といったって

の七と八の折返しの意地が政治に なるでしょう、とはいく気なも 収入はウ飼の約一割、ウ飼の水上 この橋見物の観光客も増え、その の観光課、ウ飼より人気が出て、 た。おかげでウケに入ったのが市 めてこの大騒動は二の替りとなっ の橋いつ通れることやら、現在旧 十七才の高齢「死ぬまで負けん」 り合う武藤嘉門の老知事さんは八 な道で大迷惑。ガンコ者の平増さ 上回るというお話。 げと合せると戦後最高記録の金に 橋取りこわし声朗が県から出て改 とクソ意地を張っているので、こ に橋ゲタの飛上るシロホンみたい んは吉田茂と同い年の七十八、張 く、つまり日本人の全人格的なも り所が、すべて親分関係で出来て 可愛げがもるかといいたくなりま い衆の方がなんぼ単純でソボクで 点からみるとアロハと黒眼鏡の若 然と口にしている始末だよ、こ よ、と知的な職域でインテリが平は平然とおれの親分はね誰それだ 割拠があるんですからね、時に の派閥が治り、師弟グループの んですよ。 して、そんな人間を作りあげてゆ せんよ。政治が社会環境を作りそ いる以上、どうするスべもありま ね、日本人の人間関係や思考の在

知識階級にすら各様

0)

服 j 御 用

替 御 ズボ 誂 ~ 2 高 レイ 級 既 2 1 製 1 服

9 電話 阿倍野区旭町二ノ二 デ カ (64) 7 Jt 九〇三 洋 服 店

III 喜 仙

辻

の生活驕片史として後世これが貴重な文献となるかも知れない。 諸人家の真夜中の夢から、晩酌の鍵子の数や食卓の皿の中まで親かせて頂いた。諸先生 - 編集局

村 田 周

東 不京都

魚

5

★十七時 - 日誌をつけて机上整 ★二十時 ― 家內中で一日の出来 事、劇、スポーツの話など食卓 もちょっぴり。

★一時—一二時 安眠中

★三時――この頃いつも一寸眼が

覚める、莨一ぶくしてすぐ眠る

★四時

--五時 安眠中

★七時――覚眠、一ぶく莨がら三

洗顔、

★六時ーーうつらく

★八時 ―九時 ラックス、梅干

石鹼はちょうだいものの ければ健康を自己診断、

朝食が平均して九時頃、米食少

で茶、祖先への誦経十五分位、

量、約束以外は風の日、雨の日

★十時 — 机辺毎日選句、雑稿

は外へ出ない。

★十二時---+三時 ★十一時 | 甘味少々喫茶

執筆の日日

★十四時 -- 十六時 平均この時

間に入浴、喫茶時々コーヒー、 洋菓子、一週に一回あんまさん

来る。在宅ならば執筆と読書

★十九時 - 夜食、菜によって日 ★十八時 - 毒斎から茶の間へ、 本酒、ビール、ウイスキーそれ 夕刊をたのしい。 ★二十一時---二十四時 食卓が 引かれて、水菓子の卓と代る、 に毎夜賑やかに一時間以上出て

時間です、配達人が出発するの

が恰度十時。

います。夕方から吞むことが時

地方のお世

話はつづく、私だけの床が敷か のものが寝られないので早く就 れる、私が先きに寝ないと家族

あきすることなし。 寝、秋と冬は二十時に寝る、寝

出雲市 尼。 綠 之。 助,

★一時――概ね休んでいますが、 ★十一時 -- 新聞の事務。

★二時 ――時には未だ起きている ★三時 ― 五時 要するに寝つき ★七時―七時から八時までの間 ★六時 ― 余程のことがない限り ★九時---十時 牛乳とお茶、新 ★八時 -- 朝食は勿論米食ですが ることもあります。 こともあります。 床の中で新聞や雑誌を読んでい まだねています。 ぎるからなのです。 流行る地方のこととてお茶が過 が悪いということです。煎茶の 聞が九時半過ぎに到着(毎日) 食べないこともあります。 に起きるのが普通です。 するので職業柄一応監督、指示 打合せ等、約三十分間は本職の ★十二時 ★十七時 — 十八時 うことにもなりましょう。 りがち、困ったことだと思って 話、町内会長として、商売、川 柳等、主として午後の仕事、別 から、稼ぐことに兎角横着にな に事業主としてのワンマンです

★十五時——十六時 ろう屋もみんな登校しているの 御菓子の外、漬物、煮メ等が御 地方は朝から寝るまで、お客さ 勿論お酒はやりません。 の御内儀さんが中食前後の常客 で長女と妻の三人。懇志の魚屋 三十分が中食ですが、子沢山の んのある度にどんな一寸の来客 茶口にします。まあおやつとい にも、すぐお茶(煎茶)を出し 十四時 概ね十二時 出雲という

★二十二時---二十三時 残務の

整理、ラジオはあまり聴きませ



と再々。それでいて貧乏は充分 々あり、いい気になりすぎるこ

★十九時——二十一時 摩汁のカンタンなものです。 す。女軍はおつゆが好きでない 時半頃夕食、我が家の最大の御 魚、トーフ、野菜など混ぜた薩 に似た雑然と身を入れたもので します。みそ汁の中には煮しめ が、男子軍は全員みそ汁を要求 堂で終了することになっていま ですが、七人家族では格安の食 馳走は子供が全員揃ったこの時 七時…七

ん。それほど仕事があるという

名古屋市 田 郎。

じます。それは丁度、課題吟で る身にとって有難い好機だと存 礼のみ致して居ります。お赦し みる気がおこります。これは唯 下さい。今回お尋ね頂きました もう日々に追われて過ごしてい して来ました自分を振り返って 申しますより今日迄こうして慕 ふと我が身の近況、いや近況と ものを持たぬ身は斯様な機会に 自分の行状報告に際し皆様の様 に整然とした二十四時間という 二十四時の無い男―日頃は失 茲の処何年間、殊に今年に入っ は言っては居られないのです。 さながら、そんなだらし無い事 は至ってルーズな明け暮れの私 就ての人生を再考させられるの 空気や水といった様な出題を得 しても一ヶ月の日割にしますと です。けれど日々の時間は別と 間程の会社勤めの頃だけ、あと 迄、比較的規則的な様な時間暮 て今更ながら空気のことや水に しをしたのは廿五六歳から三年 にも似た思いです。昔から今日

ら聴き洩らさぬようにしていま ことになります。毎日の野球な

★二十四時――寝酒一合、時に一 つき弱いことも根本でしょう。 がないことも理由ですが、生れ が悲しく思います。一定の勤務 と多く改善が出来ぬ意志の弱さ 伴うので胃腸に故障を生ずるこ の)が多すぎる、お菓子が必ず は午後二時から夜明け前で碁会 合五勺にも及びます。月に一回 運動不足にお茶(煎茶の濃きも

さぼります。それそこで明日 えば直ちに浅酌以って快談をむ せん代り、街のゆきずりに良友 から家庭では余り用いて居りま りませんが、ラジオと新聞は御 の機関誌の柳欄はさ程の事も有 まとめねばなりません。各職場 が皆、木曜組込みという原稿を たものの選評が毎週一回、これ 阜版、三河版、尾張版、といっ 持って居りますし、当地の新聞 日曜の二回、放送局での責任を てからは毎月、第三日曜と第四 の原稿の予定が遅れそうに成れ い頂きましたが私はかなり以前 無い仕事、お酒のことなどお問 の地方版、静岡版、三重版、岐 承知の通り待てしばしが絶対に (悪友は一人もいません)と会

ことでしょう。 く私の一生涯これがついて廻る その日暮しで有りますが山積す のスタンドをひき寄せてでもと 読みたい本は車中ででも、枕元 旅には出られませんが汽車の中 時間は無くとも一ヶ月というも 思えばだらしない暮しぶりの男 角夜の明けるまでねばります。 と明日とのけじめ無しで、とも ば、その日戻った机の前で今日 しく追われる思いです。おそら る仕事も川柳のこと、愉しく欣 いった具合です。追われる様な へも仕事は持ち込んでいます。 のは有る訳です。三日間以上の です。けれど、ですから二十四

き コーヒーに酒に凡夫の暮しむ



麻 郎

みある大阪弁が、ピーンとお 画化でウンと人気をもりあげ ある。なかなか芸にこまかい 行語を冗談のように云った女 でなく、自分の愛人にこの流 にしてまっせ」という言葉が 互いの胸に響いたので「頼り ところに味があると思う。 の心のうごきを詠んだもので 場合は夫婦善哉を詠んだの 行語となったので、この句 頼りにしてまっせ」の親し 織田作之助の「夫婦善哉」 かしとき 頼りにしてまつせと冗談め 森繁久彌や淡島千景の映 答)

テレビを買ったそうだね は云わず 夫婦喧嘩で買うたテレビと

> などは、ラジオすら満足なも をうまくつかんだ何である。 にも出さないという男の心理 までして買ったことはオクビ ろですか、電気洗濯機も買っ 買おうと云い出したら妻君が ら、テレビぐらい備付けない 訳でもないが時代が時代だか み立てたやつさ『豪勢と云う いじゃっないのと、夫婦喧嘩 て呉れないで、文化生活もな 反対して、あんたテレビどこ ね」とは云ったが、テレビを では文化生活とも云えんから がまれて僕の貧弱な知識で組 のが買えないで、子どもにせ なかく豪勢だね。 僕とこ

る図だ。北海道のサケのよう とき 郊外電車などでよく見かけ 席譲るどころか赤子ねかし みんなが吊革にブラ下っ

たぎ

まで寝かして三人分ほどの席 のであろう。 を占領して平気である。女と 云うものはとつくんへ感じた 老人に席を譲るどころか赤子 ていても、 一向頓着しな

部分品取替えますと整形科 三四

ラ 何んとかにしてやると云えば 鼻の穴に鼻輪を通したらミス る。この句なかし、にユー かるのもうべなるかなであ 通しかねない。整形外科が儲 はイヤリングをブラ下げる。 日を二タ皮にして来る。耳に る。整形外科へ行って一ト皮 行って低い鼻を高くし たがるものはない。隆鼻術 スである。 女ぐらい、 颜 の造作をかえ て来 E

うのである。病人心理を詠ん 侵した人のように思えるとい るものである。それが罪でも で、つい人を避けるようにな く近寄らないようにされるの るが、伝染をおそれてなるべ 淋しい句である。 胸を病むと一応は同情され 胸病めば科もつ如く人をさ 三五 (七面山)

往診のお医者の方がたんと 宣言

れた▼福田丁路氏(高槻市)は八月 会 不 か 朽 洞 川柳講演ならび に作句指導をさ 芦屋市図書館で 長は九月九日、 ▼北川春巣理事

謹んで悼む。本社から路郎師、 十八日午後二時から告別式執行。 川柳コント」を執筆され交通業者 すると共に交通毎日新聞に「業界 尾市大字八尾木の自邸で逝去、二 が胃潰瘍のため八月二十七日、八 に一泊の旅をされた由▼西尾栗氏 通り▼路郎先生は九月十三日の され新居に移られた。番地は従 堂氏はこれまでの自宅の前に新築 をアッと云わされている▼木村水 し、「川柳通信」を知人間に配布 氏等が焼香された▼若本多久志氏 々庵、白柳子、小松園、梅里の諸 二十九日、那智潮岬を周遊、白浜 (西宮市) は川柳の大衆化を目指 (副理事長) の岳父西尾与一郎氏 生:

川柳会統合機関として山口県川柳 からのおたよりでは山口県下の 良県高市郡の郷里の学校で講演 れた▼長尾越鳥氏は転任のため名 された▼石川侃流洞氏(下関市) 良県)は九月九日午後一時から奈 三十二に移居▼飯降白香さん(奈 古屋市中村区岩塚町西枝一ノーへ 「初代川柳忌に際して」を執筆さ 筆、九月十九日の読売新聞に随筆 日新聞に随筆「老いの坂」を執

会が組織され、その第二回川柳大 催、川雑下関支部から十七名参加 合であったとよろこばれ、同席上 会に出席。全く楽しい有意義な会 催の川雑婦人友の会一周年記念大 富士子夫人同伴、八月二十六日開 された▼小西無鬼氏(兵庫県)は 備会の懇請により色紙三葉を揮毫 催の「平和憲法を守る色紙展」進 は日本社会党兵庫県支部連合会主 万丈の気を吐かれたと▼路郎先生 会が八月二十六日に山口市で開

どこでも

通りの大活躍、開会準備から当日 状を路郎師から授与され栄誉に感 友の会一周年記念川柳大会に文字 潮花氏(大阪市)は既報川雑婦人 と、およろこび申上げる。▼丸尾 激ます~、川柳に精進するとのこ で川雑川柳まつりの優勝桶及表彰

師を呼んだ人の経験に違いな する。風邪をひいた位で医 寝込んでいない限りは往診を を軽く見ている訳ではないが 8 往診もする。必ずしも病気 解さないで、宅診もする 医者の不養生という言葉 少々咳が出る位は意に

家族 家族主義と云えば一応は理 視 主義だからと労基法も (扇子仙)

が多い。この句はそうした家レジスタンスに過ぎない場合 のだと解すべきであろう。 族主義者へ一撃を与えている 方は忘れて、労基法に対する はつくが家族主義の美点の

なり 草月流ほんとの花が見たく 三八

るかも知れないが、確かにコかを解しないと云って叱られ と皮肉を飛ばしているのであ る。家元から芸術の何んたる ような人も出て来るであろう 花をする人の中にもこの句の が見たくなり」と草月流の生 んだものと見え、「ほんとの花 くし、木切れや針金やガラス かけらが、アタマにしみ込 草月流の生花と云えば、よ つの観方であるから草

か る必要があるのではなかろう 月流も他山の石として反省す 0

奥さんの好みで女中着せら

場合は問題ではない、という でも、これだから、いただく ある。自分でお金を出すん と云うより外に手はないので ではコレにいたしましょう」 たら「左様でございますか よく似合ってよ。」と云われ うのか、着物の柄一つに対し のであろう。 る。「あんたにはコレが一等 にのしかかってくるのであ てでも奥さんの好みが圧倒的 はまだくく封建制が強いとい に違いないが、女中の世界で 女中には女中の好みがある 面白い句であ 0

自転車の上で老けてる配達

ったり れる仕事に違いない。 相当の年配になると隨分と疲 繁なので若い者なら鬼も角、 乗り廻しての配達、それも乗 ろうが寒かろうが、自転車を ばそれでいいようなもののあ い。降っても照っても、 れでなかく楽な仕事ではな てるし、ボーイと放り込め 大てい郵便の来る家はきま 降りたりが、 かなり 暑か 頻

上でいつか老けてしまうので年、二十年となると自転車の ある。同情の思いが自然と湧 いてくる句である。

ある。多少の穿ち味もある 写生句である。 が、どっちかと云えば感じ 散していることに気付くので さと云うだけでなく若さを放 女医さん。医者稼業はして 手術着に豊満な肉体を包んだ いるところを見ると、女らし も、診察室にこけしを飾って 強度の近眼鏡 をかけ、白 V

を嚙み 人を皆馬鹿にしたよにガム (左文字)

兵隊さんがムニャムニャやっいものである。駐留軍の若い と、あんまりいい気持がしな で、ムニャムニャとしきりに 愛用者からあんた余っ 間にはうけとれない。ガムの ているのを見ても、 口を動かしているのを見る 奥さんや娘さんが、電車の中 が口のさびしさをふせぐため的は歯を洗滌するものらしい のものでもあるらしい。若い マが陳いのねと云われるか ガムというも の、本来の目 知的な人 ほどア

診察室こけしも置いて女医

し、このほど堺文芸懇和会が結

も落選だと、おエラ方が大声でど

で、×印をする。これで一年間 なると、そのカンバスの裏へ白墨

きやり吟社北海道支社創立句会で 漏のない潮花ぶりを発揮されたこ の世話、余興その他、閉会後も入 村田周魚氏が単身渡道され盛会だ 子氏(函館郊外)のおたよりでは とは感謝に堪えない。▼亀井花童 院中の柳友への寄せ書等々々万遺

乃文夫(大阪市)正

一三夫氏推薦

赤ペンへ

期された。▼私は、堺市文化祭を 病臥されたので句会は廿五日に延 九日の杏林川柳会を前にして発熱 ▼河村端川氏(大阪市)は九月十 ったとのことおよろこび申上る る。それを右の端は落選、左の端い審査員の前へ持ち出されてく 風景を紹介してくれた。モダン・ いら一コマがあって、二科の審査 二十七日封切)に「制作の秋」と アートが次から次へと二十名に近 朝日ニュースの五七七号(八月

句、川柳、漢詩吟詩、児童文学の成され、創作、短歌、現代詩、俳 三十一日号に「十七文字のエロチ 就任した。なお日刊泉州日報八月 七部門中の川柳代表として理事に シズムを排す」を執筆した。▼千 言ら審査員。あるモダン、アー 労作はパァである。 なるかな。 「オイ、その絵は反対だよ」と

十九平氏は岡山市原尾島六四〇の 合で九月限り退会された。▼服部 田凡童氏・大倉四案氏は家事の都 つぶれるョ」 落選ッ!」 「落選ッ!もらい 「もらいいよ、やっちゃえく いよ、時間

ことである。 なってよかったとつくんへ思った 出てくる。――ぼくは、川柳家に と、ハッキリ録音されている。 大欠伸をする審査員もアップで

麻 葭 乃 著·米田三男之介裝幀

河本口美舟 (岡山県) 正

新会員紹介

句集 葭乃

菊半 送費 定価二百五十円

型·函 + 円

塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字

大阪市住吉区万代西五の二五

排轄口崖大阪七五〇五〇香 電話任吉(17)六〇八一

来客へ飯

ッブ付けた子が

のぞく

戦後十年まだ

仏

壇

は

カン

箱

麦笛は鳴る鳴る今日の

恋 i

B

な

る

字师

林

影

丸刈にしょうかと妻を試

L

てみ

くず肉でも買ってくるかと土用

鼻と 水虫 がを取った左遷の人に逢 簿の危機 今日もパン今日 北 麻 III 生 \$ 春 路 鉒 敷 巢 郎

ヘスタイリストは下駄でくる

選

選

藤井

五茶

117 菱田 同

れ

お二人のテントは宵の

П

を閉

8

敷いている夫がねずみ追うてく

お名指しで聖徳太子へお

する

雨乞いに寄って西瓜の出来をほめ

端下株持ってダンスがシエビー

12

7

から

素麵を井戸から揚げる蟬 主治医にはみせて彼氏 お見舞のしゃべるに委せ

しぐ

神戸

に見せ

Ø

咳を耐

え

秋

った

頃

\$

言

兵

班

県

文平

同同同计同同同同

台風予報女ば

か 貸

b

取

b

乱

L

灭

理

L

て腹 办言

をた

7

実家から汗になる包み嬉

しうて

一とくれの土になる軀に金を貯め

金魚から熱帯

魚

^

移

る

儲

け

11

[6] 同 Ŀ 同 同

14

吾が希望燃えに

燃え

挨拶 暑がりの末っ子大事にし 翌る朝おんなは爪を截ってく 菊賞めて芋を 作 呼び出して逢えば十九の気にもち 裸でもよいとは貰うまでのこと 詫びて済むことで意地を張り通し 御 待 むし暑さ寝ござの音も気にさわ 朝 トンネルの涼し 女は魔物そし 蛸冷える迄を障 お 花道へかかればすごいぞめきよう 精霊の燈が橋けたにひっ ゴム長をからかうように夕陽照る 颜 中元運はやっぱり運 主人も洗濯をする洗 LA E に稲 の旅 へ水の日課を子に与え 賞め 往 一復を て男も 別が関 Ġ 子 れで蠅 が濡れてい 船 夜 かか て賞 8 \$ £ もは嬉待 濯 V L b 機 5 0 0 0

大

阪

竹

板

東千代美

花枯れたみたいに夏の病みあがり もて余す余 事なる稲 用 りなき夫日 寸飲めますなアと顔 根のペンペン草も 族 篠山支部優勝の報受く 様へ女給の並んだ へ颱 生 風 曜 人医 1 ごとに れ から 1 る よ b 2 夏 釣 b ゼ 神戸 熊 本 H 媒

淵 仲どんたく 同同 同同 同

思想に多くの

共鳴者が出

テル背後の力と

なって旧教を斗わせたのでした。

大東亜共栄圏はなやかなり

し

だと歴史は教えます。ル

1テルの 来まし

たから

イツ語にラテン語を飜訳

秀敏

める土語、

民族語ともいうべきド

に成功したのは聖書を誰れもが読

マルチン・ルーテルが宗教改

告白へ散歩がながいこと 惚れている方がハン が光の星 呂焚いてやろかと日 神バス 5 明 址 0 Ut \$ えて 5 を 女の 12 カ 7 チ 曜もてあ び 敷いてい かっ 7 か 起 77. 族 b 大 阪 rft 橘高

物 3 九

大版 111 米虫 同同同同同 乃字

じんです。とりのこされたみそがかに妥協の余地を残すことがかん とるようなものだそうです。どこ い重箱にみそを入れてしやもじで が七月早々にあるものですからこ もらって来ました。政治とは四 ると何か勉強になるものです) のところ賑やかなことです。 とりもつ縁となってなぐり合い その一つに政治の定義を教えて

仲々実際になるとむつかしいでし が期待されるのです。 よらが相互理解の上に人類の幸福 ならずにすむのだそうです。 筋を通したり、 田 顔をたてたり、 方

幸 福 を 幸 福に (九)

藏

風子



ただの

筈の

水でもめて

る

Ŀ

ゲ

村

の小さい

ボ

ス

痩せる薬も

娘 程

盛

b

は t から

恥 i 腕時

計

篏

8

T

12

尻ポケ

"

高

0

知

n

本

村

そら来たと西

瓜

0

蟻

雨

チ

ヤンバラれた様に思い

草に寝

生きるのに迫わ

れて死

結

局

は

銭

がほ

L

V

で

散 から

会 出 宿

ほり葉ほり

聞いて夢など持てぬ

性:

大

阪

Ite

藤村

梨花

水

ディ

ビル闇米かつ

4

肩 \$

高野山

Ħ.

废

違

3 冰

海を見 落ちぶれ 帽子支け 子に出さぬ みち潮と一緒に島の陽 客を待つ 大安吉日 船の 愛 0 コトコー、雨 白 E 1 お江 原子 先 V せ 金 痴 系図が邪魔 F V 孫の名 戸で食っ 美 ロスさんは下 か ルの冷えをさわった来 カ 帰 でつ K 研 0 へ歓喜のさたん屋 す てます 究 6 3 たとろの 0 は 預 所 世を拗っせ 薄 H か 起 化 げ お I. # 粧 土 b 竊 大 [12] 逐 府 di

浅野

瓢太

回 同

たる金を入れ 村 が水 か L と妻 泳 0 鳴 夏 wid 着 災 10 H III. 市和 同 同 同 岩 同同 [ii] 岩 同 fii 田 += H

楼

請合うた西瓜

が後から追

0

注

意

6

高

V

庭

木

枯

n

商

0

火

0

車

だ

す土

用

県 同同 吉 同 Li 同村 原 Ŀ 紅 旭 月 童

こをろぎの声も

届か

ぬ二階借

b

大阪

iti

竹內花代子

病

同同

女さみしや口

ıl:

料

0

高

を言

同

ちびた下駄はいて淋しい音をたて

会いとうはないとも言べ書く仮

1 -蛙眠子 三歩 島 ---

半七

L

*

分

助

U

7

<

九

Ri,

取

19

味方ぶ

ル

を

探す

0 は

野

球

作

統

<

炎暑 に挑戦す

0

田 3 子 Ł

2

1

う

鳥

耿

供

田

風

to

U

b る 10

ri

8

見

がある

譲るにも

勇気が要る

悲

L

る

同 北

を

雁

す 7

花

吹けば飛ぶ様な男のアロハシャ

では

俺も

彼

女が居

3

2

う

魚

肩書きへ

酌

でくれてるとは

知等

掀

0

士: 雀 だらけで

産 苦

で息

子

意 声

見 を

3 あ

0

ない

げ

はめ

れば女工とは

見え

す

趣味

0

座

に招かれてまで

酔

わされる

阀

県

F.

知

恵

美

風

0

音

が

涼

L

V

掃

"

暑いのにやっぱり腕を組みたがり 好きなものあとへ残 麗屋の 橋で先すシャ ーソクも形をくずす暑 どれ でやすジキ 鯛は喰 - つ 0 どれ 唄 女中に呉れた もチ どれどれどなれ ~ 0 ップの IL ツターを ない とは の顔でもみ手する L て箸をつけ 老 生 切り初 店 御用きき き負 b K 活 び 向 心眼鏡 1) U 3 大 兵 神 版 10 级 īţī 縣 rti 傍島

永尾 同同西 英断 晃

戒 取 きりようよい手の 名 むけば孤独になれ さも子 役 しゃれ 長 男 たに僧の 空 酒 を だ 達 平凡を見てさば な U る 6 V 壁 強 見 見 1 直 0 が 直 U 3 好 な 3 b れ る b 3 n 都大 74 屋 14 性 dian 里 田 田 凡 2 + 2

んだるひまもなし 駈けて来 だすす 来 0 179 糖 B 路 ıt: 市 徳永 同 同 同 同 同 1 畑 自 貴美 由 朗

ます。 があるので、その点を充分に心英語の、日本語には日本語の特 が出来るのです。し せんが似たところがあればこそ訳 来にくい生硬な直訳をしてしま りながら、ズブの素人には理解出 ていないと誤訳という心配 たものなら融訳のしようもありま 箸にも棒にもかくらない程ちがっ 英語と日本語とにしたところ に心得 性

程忠実ということは問題に 学習本位の場合ならとにかく、 ともそういら点からうたづける 外先生の訳が名訳であるというこ なくなってもい」のではない んとの日本語にこなれ切ればそれ学習本位の場合ならとにかく、ほ ということになってしまいます。 なく日本語同志の場合だってあり しょうか、坪内逍遙先生や、 飜訳は 草紙はもとより、 ます。時代が異れば註訳なし 理解出来ません。 結局飜訳ものは読みにく 何も外国語 源氏物語や枕 近くは文語体 の場合だけ 7 5

[1]

同 同 池

静馬

らとしたのもその頃からでした。 こと、話し合えば いことを考えますと、 の人間も臍の二つある人間も、 と私が真面目に言語問題に取組 かく八紘一字を実現するためには な労力が一部に行われたことはほ た。日本を理解させよりとの真剣 なのです。 んとうでしょう。 十人十色ではありますが三つ 重したかわかりませんが、とに どこまで土語 わかり合うはず \$

牡丹には

仕

は

札

所

0

庭

7

死

県

な

思

もう ケロ 安静をセ 安いからああ浅まし 洗 サングラス布哇ぐらいには バラ活けて 笑わねばならぬ慰問 石 F. 面 濯 > が道 性 油 会日こ ボ 終る芝居 1 もまあええとし 1 機 福 > ケの写真を抱 をゆく婦 汰を詫び F 家內 + 0 な ロ買うて遅 神 男の 蛆 セイイン ż 虫 I. 自 たたその 句い消 0 長美し b 仏 業 孫 から 面 V 0 B 手で 刻の は 1: 1 7 0 V 会 音 H 13 列 レント L 7 起 映 ままで老 H ちと言う アテられて 羡 を とな 3 か 1: 画 を持 踏めるなり が続 1= 部 想 ま < か n ゲン 屋 る 権 け b b T 3 V 3 れ Ц (F) Ц 38 天 贝 塚 丹 塚 911 理 塚 ıtı 市 111 市 rts 同同 Bul 同 同 小同 同 小 同同 小 井 島さぎす 部 本 JII Bul 静 かい 千年 季良 つみ 梅 観 堂 林

Zii. 報 尿 胶 縣 15 竹 同同本多 護 同 同同 守ト 2 坊 月 夏 盆 Ti

太田 上失屋品恋上 肥 おもらいの銭を数えるのに見とれ コ 踊りレ にまだ間 魂はたくまし スモスへ女教師午后を欠伸する くなる風で洗 の痛 み計 0 3 気 画 1 たて 天 があるな がうま 倒 西理 F 電 れる音 二枚こき使 け瓜 話 濯 7 **祖父の意気 へ仮名を付け よく乾 V 2 办 ٰ 社: す

秀才

2

才媛だ

からも

う

别

n

踊

りやぐらの下のス

术

2

サ

入り

へ如何やと父のあっけ

な

マも でから

のび

T

失業

\$

だ続き

0

にされると知

5

す 先

妻 10 b

昼

寝

H

来

見

Œ,

野

771

小鏡子

を

す

手

あ

腕 待せ

県

田

百

合子

の川柳塔に水客さん

着

理

野花

鶴美

*

7

国谷

散

步

同 松

松

ILI

本

窓城

同 広同

な

腿

6

見ら

ズ

0

よった妻

安星寝

の手

心 命

配

ただし

紙母

H

洒落言って見舞の客を安

けちんぼうと言われる程の金廻

É

分とは元軍

人の

專

務

な

0

3

++ b

> 欠仲 水底 E 交 陽へ無情わたしはひまわ 七 県 7 沙 商 キッスした唇を繕うコ 1 月がびち 3 役に見てもらいたい 8 風 してただそれだけで意見さ " ガ 0 市 0 " 1 たく U 鮎 夢 B 11 ル 1 虾 ンド びち少年連 を また背伸び 0 1 赤 C 宵は 3 L ·汚職 絵 3 テ 月 0 やく K 扣 から 所 闹 陽 · んでもらいたし してキスをうけ 汗 れ E B りその ぬそうな \$ て来 夜 を 故 光 赤 機 障 V 3 性嫌 3 字 虫 1 中 同 れ H 松 平 Ш Ш 都 ηţ 171 111 同同 吉 同同 久

家代仕男

禿げて来て医者はます/ スしてパラソル森へ置き忘 気取 パク 繁昌し りかた ŀ 奈 良 県 野 同同 Ш 木 同同 村よ 田 本 耕 を 念 路

野 海 12 豊同伊同同 島 原 明 林

五十久

0

肉が隣りをうら

やま

せ

玉

裸はだか女どこまで金

K

な

一向にシャンと見えぬ

どんぐり 流

の一つ一つに

あ 9

3 7

童

新

3

新

润

ifi

大阪

竹

瀬

行は他人

0

服を

82

知

キッ

三浦 同 餓 涼 治 秋 郎

我利婆 たことか

いよ!~感じております。こんなはやはりむつかしいということを ものか句にしてみたいと思 場合が随 随分あが

てあげなければ充分 て若い人々に は飜 出来ない

季生

性を充分に理解し発揮するところ 殊性のうちにあります。 飜訳のこつはそのも その特

生みました。 いらきめ手を縦横 続に飜訳するところに電話 ともなりました。 流の断続ということが電 光の強弱を電流の断 音の強弱を電流の 馳駆 電流 したから 断続と が生 半

が、川 り、文学や文学の内容を絵 とばを絵に飜訳した文学はもとよ その精髄を把握するために川柳 的興味は実はこの図解 どれくらい貴重な働きをしてく 図解建 図解にも見られ 劇や映画にも見られますし、 同様のことは文学を 想を手短 柳に興 立の 、味なもち出したもの 一環にすぎないの かに表現 ます。 75 私の言 0 画化 C 且. 寸 7

だがその世界へ入ってみて川ことかも知れません。 れは一般に川柳をされる方にはあ まりかくわりのない巧利的すぎる

7

後

5

乍

水ぐるま盆も昼寝もない

Н

照

冷房の映画

一家で避暑と

ヒス泣けるだけ泣、見て気が変

身を甲斐性無しのせ

草取り

6

娘

H 0

P

へそくりで

1

マち

帯も

疲

れは

ちつ

ほ

Ut 罪

Ut

0 自

方

す

歳などは気に

世

ぬ年を又

聞

す

母

売が

0

魔

廻 か

數

え る

> 3 邪

な 7

から U

からくり。

きよせた

秋

を鶏

蹴散

6

かい

2

ター

は から

動悸の方が先

K

切

逃げた娼婦

羨まし屋

0

美

から

出 す

る 3

袁

ったなしを協

定

将

b 顶

水喧嘩

のあ

な

狂

凡

茶

也

る時計

0

7

出

つけ

3

酒死んでから

供えさ を

母

約

芋

走 束

を

追 蒸

b

片恋の予感切手の舌ざわり 七曜を牛乳で知る夏休み 有田から又豊作とはじいとり でめる といとり 朝帰りライトをつけたまゝ走り 便をしてきてビールまだ飲む気 買って履くのがおしくなり の保護では いとり やれ され 児 棋 る b b 7 V 4 九 b 7 ıl: 6 b n せ 0 る 絶 学 32 大 125 字 香 to 災 兵 兵 大 岡 天 76 部 調 版 問 居 385 水 NE 胶 P 711 di 189 帺 111 its 製 骐 果 府 艇 联 梨 渡 神 佐內 米浪 松高 岩原 寄 香 青木 遠 高木 同 同 同 同 同 同 同 同 出 坂 久 原 杉 司 須 辺 金 III 山 手 八米奈良 П 田 伊 進之助 白猫児 土佐太郎 津 隆文 徴酔 綾 明歌 俊江 荷 志 111 女 美 薬局へ効い、反省の机。 安来節出た 栄転 戦後 母も娘を 割引でよいと娼婦 簡易避暑買 定 後 風 死にそうな奴を金魚屋添えて具 人生もこ ニコヨンの 七夕の下でビー 待っていてくれる妻あり左様なら ああ時は金 恋人へ店員 貨 炎天の日傘 輩 不足の顔 期券ボナンザ 邪一つ引かず金もよう貯 ボート汗で に来たとは 堅う くとし 派は実家 した途 へ豚児を など要ら へ大も嬉 いいんだいいんだとくでしょう おぼえてもんた \$ が 和 用 わずデ 3 7 たお へ い なり ローカ \$ か Ś 4 漕が けわ 夜 0 手 へころ な 82 か 車 グラム連 Щ 拍 頼 L 祭りに īlī 題 パート廻って来 ル 民 礼 0 と云 してマ 12 E" い荷で む酒 子 は か V す 0 らう職がなし の柄 か 放 0 ラ 7 0 らか 迫 傷 i. よく 蛸 眠 2 う 0 のなべに泣 手 6 声 肩 れがあ を下 をさ 来 請 を 美 0 加 りこけ を 7 銀 渡 安 めかず ~ 0 具 届 水書 欠 b され て裸 見 容 買 素 3 婚 w な 電 82 \$ き 伸 n b 九 せ 敵 法 3 F n 0 恋 兵 岡 大 堺 * 岡 大 出 换 抬 ME 胶 阪 良 Bh 裘 33 25 談 城 114 誤 ifi 柜 県 具 织 府 B H.F 165 県 越智 吉田 岡崎 同 前 同 江 堀 田 岡田 同 同 同 木下 青柳 御戶 同 同 同 同 石 板倉 同 谷沢 前川 中 橋 扇子仙 万古人 左文字 幽谷 賀太

> " 邪魔 けなも 0) 1 ヤリ ンガ と携

にもきらいなもの が あ b ま

好祐

句になって来ません、何しろ風、以前から考えていますが、これ とりとまりということに りではほとんど共鳴者がありま す。さてこれを旬にしようと大分 なことをいうと大へんすね 虫」という柳誌を発刊されている ないのです、柳人のなかには ば水泳とランニングより、生来の無器用ものスポー ら思うようにならないものです マリのファンのいられる中でこん IJ ピンポンのマリ はマリです。マリはボー 妙なものがきらいです、もう一 根をもってあの空をとぶ鳥 てもらえそうにはありませんので普通の表現じゃ誰にもわ も、どうもマリとはそりが合 まで、マリはマルイものです つも思っていたものでした。 のきらいなものはトリ からラグ ーツといえ 知らな ピーの なり ものじ 0 京 は 玉わい カン

亀

郎

休

凡平

三文

笑太

この二つには興論の共鳴がある程えられなかったでしょう。すると が、これが句として発表の域にジヤをずばり批判されていま かっていたどかれたからでし したのは少くとも選者の先生 水客さんはイヤリ 先生にしても先生ひとりし 出来なかったら発表の中へ加先生にしても先生ひとりしか J. わ達 力

越

山

水

75

村

7.

変 ラ

1)

酸骨

H

湖鳥 柳叟

好

H

夜

貧

4 頭

1)

素陽饒

忠

鶴

10

明マ庭

H -)-0

奈女 つよ

周

焼

酷に

"

人

買 成 割

引

0

食亭 " 借 あ ×

3E

風

作

t

1

0

W

から

老

恐妻家などと言 ざるそば 功に酔 欲もな さげ れば安 ような皮 から たくましう 昼 ルでも な 办 L 1) 渦 て来て 会 # 納 る 話 2 見 36 b V 見 踊 寝 ~ Ut 1) 円 のに -扱 7 7 給 話 世 時 出 す ちて 囃 見 82 少 九 生 ば 1 から ず次 来な 內笑 V は 뀝 躍 間 来 10 3 征 子活 つか 散 船 13 1 HH 味 b すっ 15 見 16 楽 服 な 35 学 5 财 0 to 設 Ut 九 H 43 뭉 I E 礼 0 了 L -0 L V 元 4 J. J) 爪 17 5 3 たほど値 手 7 7 眠 かい 読 過 は 0 格 石ま in 12 艺 を 5 る 持 ř 1: 日につ 1. な 8 う V 受 3 破 た 去 111: 住 h L を 越 反 を な 15 羡 瞳 打 5 を 7 盆 T. U 九 0 れて 1 > 道 が来 金 赤 か 抗 時 3 景 35 13 1: 課 0 来 議 障 恋 5 だ 持 流 hi 28 [1] か 8 0 な 14 3 tt 期 間 也 長 V b 0 九 3 10 す 3 ち L 気 員 3 1 0 0 大 Ŕ 高 W 広 NZ. × 貝 gry. 八八八 兵 大 8 4 133 H 4 夫 70 米 京 郡 阪府 胁 版 40 55 飲 院 部 Rt 沒 R 85 治 180 Ė 鄉 戚 撼 塚 Hi 理 th B 虫 iff 鼎 iti 概 枞 下届 荒木 同 111 秀 山 和矢小池小野田口林內田呂 星同 水 野 奥 杉杉山光和本本根好田 永 illi 13 富 本 田 戶 島葉乙 上美惠子 111 林 呂松 見 П 本 田 収 スミ 卯之助 花 1: てるじ 英州 派平 桃 紅帆 陽石

周

村

女

71 貰う気 保母 小 長女 サン 婦洗 この 坂道 他に 夏休み 親洪 4 失恋を宥 pu 跡 古 スケジ 古着では 産制を英 夏 偽 さんの だけが ンニン 人誌 族会は 守 0) 味 だれ 水凉 濯 がび 31-休み 収 0 グラス 合同 t 似て 0 果さ 40 もよろ 樽 6 を 7, にな 背 b 冰 0 布 越 けば忘れ 行 空 5 n 1) 智 な 水 若く先は す 20 9 111 頭 3 5 ~ 1 合 知で出 舞 0) 戦 L 1) 3 ば ŀ きり 术 か 見 恵で女房 水 71 ブ 1) 0 N D 混 ま る 2 0 演 IK れて けて三 ンテ 栄で 2 盛沢 + 6 2 K 82 を思うこ 1-来てま 姉 7 父 待 悪 倖 10 説 L 3 0 馬 たと 代の 次 + 親 葬 鏡 10 相 いら 7 た を + 不 剛 V 籍 を 男に 鹿 13 111 樣 どく U 器用 L をほ 调 0 お 置 手. 儀 だ 了. とは 訊 0 南 名 1 6 見 10 7 2 な チ 星 7 7 0 < 去 5 ま 82 10 + 行 老 2 待 生 か H to 7 2 見 世 3 歌に だと言 めてや K 7 申 4 3 幕 掘 37 が す 断 賑 6 < 少 七 が 呼 P 九 カ 舞 12 2 10 b L 千 チ 見 涼 あ 笑 0 J 6 か n 0 6 続 あ -若 8 ++-な 3 賞 出 切 行 ば 兼 来 增 あ 75 4 家 b 3 n 10 す 1) < 飯 せ 3 裸 来 3 九 す ね # 12 L 与 元 b 2 3 V 愛擬服 松江市 ,64 38 评 福姆県 部部 4 ili 76 田 14 角書市 觞 倉 大 学 大 大 群為與 和歌山県 岡 福 186 和歌山県 茶 大 大阪 辺市 IRE: 7 口傷 g_i 抬 敗 腦 耿 敷 洲 85 洲市 M 111 N Ė 阀 知 資 BL. ilī iti ifi iti 麒 県 県 153 112 11 成鈴矢 横上尾 富 荻三 上 春 本 代 田 杉 本 東 原 竹 恵 本 村 九 加 雪 崔 朗 郎 雄 郎 正 子 一 人 峰 雀 朗 郎 雄 岩田 平田南南 浅渡岡岡田辺本崎 室井 安平次弘 阿部たけ 久仲桝木保谷本村 松 谷 JII 浜 Ш 富 永喜 﨑 八九弘 八文 岭多 布 祥月 堯二 苦 \equiv 久 蕗 喜 秀 + 寸 朗 道 銭 楽楽

男 保

OK

な心

のでら

願

を う考えるとトリとマ 句 不能 でには生 0 限界化 CL やさし IL: ij, 力では 永遠に V. E 旬 るの にナ か作無

いられます。 句でな 幽王さんは 1 てもらえる句です、 しれ t ント ま いかもしれませ 七 " これ ルフル 私なら 1 200 他人に 腸 んが、 句を ネ あるでし せ素直 わか テ 何 かって 1

不可私 のです。 かとの希望的予想も持ちたくにかられますどっかで、どう の平和日 も知られたいとする願い、これる、とるに足らない考えてあっ とは思 がどれ和 ります。しかし川柳するものへひかないことぐらい私にだってわか るかとも思う れるならば 人にでも日 5 ては世界の 間の最小公倍数的慾望に普 少くとも 4 として、 一同じく、 位役立つかと思いれたので、こうしたわずっ 心いませ 0 本を 壁をもつき破りたい画 H 相 本人の私の 中 人に、たとえ一部 この 万理解 心とする のです、一 h 力あ 獅子 努力をすてよう 世 志 で、どうに 界平 小明 どれ程深と うのでない はそれ以上 世 せんとする に場合に 筋縄で 界 세 って ますと な営み かの永遠 少く なる 遍 6 事 かる 7 LV 1:

-It 長男歌生日に 大・六

主幹出席▼川雜淀川 支部

市

午後六時

は九月二十四日午後六時 開催▼南海電鉄川柳会

ケ辻川柳会は九月十五日午後二時 ▼大阪逓信病院島 友を誘合わせ ではあり、棚 作句シーズン 光明寺で開催 バス停前、 本社句会は 寺町二丁目 後六時から 月七日(日 市

会は九月八日午後一時から殿谷の 和寮で開催▼大阪府警察本部川柳 月二十五日午後七時から一伸居 会文化部杏林川柳会(大阪市)は九 から三階図書室で開催▼南区医師 上何れも路 (大阪市 から親 句会 柳大会は十月七日 日台風十二号のひどく荒れている 開催 部川 ▼川 を期することをお互に誓われた由 市慈愛幼稚園で開催▼川雑米子支 記念を交通局病院五階サンルーム 午後五時から「川柳大阪」二百号 催兼題は「天国」「新築」「ハイヒー 大いに祝杯を挙げ来年も連続優勝 毎日新聞連載中の「この人たち」 橋南詰の中島小児科診療院で開催 東淀川区十八条の木村水堂居で で開催▼川雑篠山支部句会(兵庫 に小集句会風景が掲載された▼大 市交通局川柳会は九月二十六日 ▼川雑下関支部句会は九月九 柳忌句会は九月九日節枝居で 雑倉敷支部句会は九月九日同 温獲得祝賀句会を無鬼居で開催 は九月八日川雑川柳まつり優 は九月九日午後一時から三休 ▼川雑婦人友の会小集(大阪 云は十月七日(日)午前十時下関駅楼上で開催▼熊本川

て来会されたい



立. 建 **C** 內境寺性天都京 寿 紅賀平 2 碑 句

院で開催される選者浜夢助氏(虫 本川柳作家協会では九月二十三日 午から関根木九居で開催▼中部日 を開催▼復興五周年記念観菊川柳 町」「玉手箱」 大会(山形県)が十一月四日(日) で開かれる兼題「ボナンザグラム (又はクイズ) 柳紅吟社主催の下に宮内町蓬萊 から西祐寺で川柳忌句会 (東京都) 「二階」▼川柳 「太陽族」 は十月七日

> 代子さんに 三十日に花

に出席後、

句集で集句五五 声刊行会から出版された氏の第三 閉会の 加され 藤蝶五郎氏 ▼和 柳大会は九月十六日午後一時から 九月十四日夜、三友クラブで開催 并造船杖季川柳大会 閣で開催主催尚崎川柳研究江▼三 は十一月四日 記念·市芸術祭川柳大会(岡崎市 各五句▼川柳おかざき創立五周年 雪の声」を黒石市市の町五〇雪 養所で開催▼大阪市民川柳大会の 大谷五花村氏(声)前田雀郎氏(楽 (松江市) 氏が担当することになったので ロに壇上座談 歌山市民会館で開催▼葦川柳会 汐風句集 歌山番傘川柳会発足記念川 辞は木口賀峯氏に変更▼後 川柳雑誌社からは清水白柳 は九月十日夜、島根療 柳 (黒石市) (日) 岡崎公園內巽 から刊行され (各社一 (王興市) 」が今治市 美本、 は自選句 名)が追 は 放送され から川柳 日午後三時 は九月十二 京都ラジオ 遊ばれた由 氏(京都市) ▼田中鳥雀 洞氏(福岡 英舟と改号 児氏 吉の温泉に 市)は九月 帰聞された 見送られて ▼速水真珠 市)は今回 ▲山本柳洲 財布」

日肥後人

短詩文学連盟主催の短詩文学講演後一時から読売新聞社講堂で関西 要を訪問潮花居に宿泊、 雑婦人友の会 るのでお含み願いたい。▼池上知 演される。当日会員の申込を受付 会で「凡人の立場から」と題して講 美さん(岡山県)は八月廿五日来 潮花氏の案内で本社に路郎師夫 売品▼堀口 塊人氏は十月七 翌日の川 日午

九

年六十七才。謹んで悼む。 れた。北海タイムス柳瓊遙者。 食 道等のため七月十九日に永眠さ

行

熊本日日新聞、

ラジオ熊本の共催

から熊本日日新聞社四階

*1 12

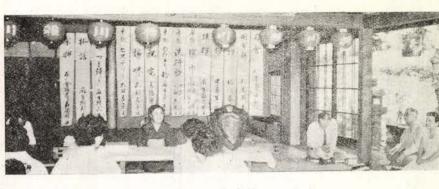
田六竜子氏の肩書の川雑本社は川 り▼九月号一五ページ二八行目永 と訂正、作者珈詩郎は珊枝郎の誤 雜玉造支部と訂正 本妻は御身体にれと一寸妬き」 月号二九ペーシゴ 段二六行目



(高松

3店に共通です は先 お 何 〇〇円から カシ 鲤 を 6. 贈物 4) 様 選 す 17 h る か と存じ 0 0) \$2 B 商 か た 品券 7. V ま < か

小樽川



ガ tr 史 0 棚 話

> 梅里氏は賞品寄贈、香林氏は苦葉舟、摩天郎氏は句会進行に、好郎伴を兼ねて優勝楯の授賞式に、淡 ばなるまい。 たとは。とこれは参加出来なかっ 集「旅人」を二旦読しより「福寿 外の発展に驚き、生々庵氏は、句 までの苦労を述べ、春巣氏は、意 佐のため等々でたる。以上あらあ 氏は講演、潮花氏は葭乃会長の補 夫人と余興出演二、春巣、生々庵 た男性諸氏に一言申上げておかね 器でご婦人の胸を打診するあたり 草」を三肢読むと、小児科 高くそれなのに、モグリがあ 医は弁術」の感ありである。 篠山の無鬼氏は富士子 潮花氏は、云の会結実のきよう 女の 丁夫人の

好作家出でよと叫ばれる。会員に 彼及するこめには、もっともっと され、完全に男性閉め出しが開 者はゲストであると厳そかに宣言 番に飛び出す。 **葭乃会長は、きよらの男性出席** 友の会なもっともっと全国的に 少女作家もいる、今こそ男性 に負けるなと、語を強めて、チ 学菜夫妻が「夫婦善哉」炭坑節の 若菜夫妻が「夫婦善哉」炭坑節の 芸菜夫妻が「夫婦善哉」炭坑節の が出来たところで万雷の拍手を浴と、感銘深い柳話も、お後の仕度い」という言葉を返上するように

ラリ路郎先生の横顔を見られたの は七十を越した老婦人作家や、可 路郎先生は、兼、 さないった。 席題の被講

月二十六日の光明寺は、男子禁 そのしつべ返しでもふるまいが あーら、お珍らしいワ…… まあ、しばらく…… プロローグ

女性版大學山

すんでから、

111 雑

乃先生すら、明治四十二、三年作家の作品十数句を例にして、葭 名句がつぎつぎに発表されるに至 世に遺るあの「吞んで欲し」等のに腹乃先生もそれに共鳴され、後 れた当時の作品は、新しすぎると 句にしていたことから、現代女流 明和のころの古川柳をその言言、 までの「つなぎ」と前置されて、 難じられたそうである。そのうち 頃、先生が川柳の革新運動を起さ れ、明治時代の女流作家は宝暦、 女流作家の句に就いて」と題さ 余興の準備が出来る お顔を覗くと、「ウムーやりおるれる。記者はこんどは路郎先生の 格の独壇上。それもその筈、踊り塔の句ですでにおなじみの貴洲さ 女医阿茶さんの糸で練やかに舞わ のお師匠さんとある。 てとった。 ワイ」と、イトモご満悦の色を見 鼠食付の会費で二百円は 常盤潭「松島 中央にしつらえた舞台で、 舞 踊 重 ね 扇」は葭乃先生 二は潮花氏の川 上が会

柳

のレコードにのって香月さんの 側からの声である。 ァと洩したのは、慎しむべし男性 舞踊「深川くずし」は おなじみ 安いな

やかな場面。 がきようこそは手八丁で大活躍。 舞踊「上げ汐」 足八丁の潮花氏

の聴診

知り子どもらの思想に歩調を合わ 即ち母性は、川柳によって社会をよ勉強せよと叫ばれる。女流作家

七、

せめて川柳家だけでも、「古

唄、阿茶さんの糸と役者はそろ 場、友の会新理事長とし代夫人の であろうというもの。 盛会ではあるし、潮花氏最良の日 ころの生々庵不朽洞前理事長の登 舞踊「蝙蝠」特別番組 であると

びて降壇される。

女人の館

な小さい舞台で踊ったことがない 心発揮される。 座の舞台はまだだがね。 ので、らまくやれるかナ。 と、ここでも「医は弁術 歌舞伎 L ...

ソプラノになったりバスになっ

同 同 理能区 理事長 婦人友の会役員 八以版 木 降 酒川永和西竹藤 田島田田田內村 岡田 直原 須藤 桑山 麻生葭乃先生 高辻塚 村 本 池 青西 きさ子 知惠美 清葉都登一花梨 乙詩志 代 子女子子亲子花 富士子 ふみ香 みち 子子月 俊 德 節満 寿子 月

舞踊「デカンショ踊」いらまで

見せつけられたものである。 婦愛な、そのオクターブによって のうたごえに合わさんがための夫 たりするのは、夫は妻に、妻は夫

4

ぎこちない妻の爪弾でも明い

爪弾きの窓でバタ屋は汗を入れ

きる子

昨夜のし返しやけにふりまくのみ取り粉 蚤取粉ふられた猫のクシャミ派手 のみ取粉きくめがないのかまたかまれがンガローへ要のみ取粉まで用意

富 奈 良 子

のみ取り粉くしゃみしいくまいてゆき

と問美

爪弾きが旦那の小唄追っかける 爪弾きは今宵も来ない人を待ち 爪弾きのいっと人気を捨てよらか 爪弾きに思いのほどを通わせて 爪弾きのそっとのぞけばワンビース 爪弾きの唄半分は恋がすけ 三亀松と言う爪弾きへふと迷い

德俊明若ふと紅紅千 みし 子江美菜子代梅梅永

のみ取り粉DDTに座をとられ 母ひとり寝つかれぬ夜の蚤取粉 蚤取粉去年の罐がさびている

のみ取り粉では追っつかぬ下宿部屋

花梨美和

紀子永

子里

のみ取り粉撒きやと納屋に宿めて呉れ

兼題「のみ取り粉」麻生葭乃先

生選

ès ès 子.

爪弾きを聞いているのが金詰り

魂は抜けてあかつき近き三昧

弾きもあいて昼寝をしてしまい

見参したいものと記者は思ってい 氏のデカンショ節佳作入選作で再 んのお家芸。次の機会にはひか平 もない篠山土産。富士子、初穂さ

場へモンロー張りのヒップを向 **栄をとハンカチを頭へのせ、「は** よく五人の学士が出ましたらご喝 御清子さんが、軒下三尺借りらけ きしての手品で御座んす。と首尾 んと、白柳子氏の清水一家の大姐 裏と表に種も仕掛けもございませ だしましたるは一枚のハンカチ、 手品 「ブン学士」。 その上へハンカチをのせ、は 学士」に始まり、クルリ会 五人の学士」えーとりい

ターとあって、そのいでたちは写 梨里、貴洲、潮花諸氏のオールス 舞踊「ちゃっきり節」は葭乃、

真のような本格的なものである。

にいたっては天下の至妙。流石に められよ。 潮花さんのあねさん冠りにお目と 哥沢「萩桔梗」ほか、阿茶さん

る。 声だけがはいってくるだけであ ーンとさせる。ただ庭園から蝉の 名取の声節は、ざわめく会場をシ たまらだけあってこれも名調美吉 の梅里氏、一ワイは真打やと。の 小唄「米山甚句」と「都々逸」

グラム流に□や○で伏せ字を必要 で酔わせる。

少しも変らぬところに満場湧かせ 奈女さんの独演会。米若の文句と とする無鬼氏の名演 漫曲「佐渡情話」は梅林改め花

> 興の幕となる。 流行歌」の初穂さんでこの余

> > っつき難いが皆さんご親切で来て

と、きようのサービス係り男性が 一角に仕切る。中央が箱型になる 懇親宴に入る。 細いテーブルを

きらいなのか、残念ながら聞き洩むのが嫌いなのか、飲きないのが あからめて梅里さんと酒談義。飲と、梨花さんが美しい顔をヤヤ 国か女護ヶ島が現出する。 なかなかのサービス振りである。 やサイダーを持って好郎、梅里、 その中にはいるのである。ビール 潮花氏がお酌にまわる。正に女天 と、梨花さんが美しい顔をヤ ーわたし、きらいですの。 一ウイー、サービスが悪いわョ と、どなられてはと、男性軍

らしてしまった。 岡山の美舟さん、大阪の人はと

> よかったとチラリ瞳がひかる。 い一日が薄暮とともにいよいよ大 稚気あり和気あり歎喜ありの楽し 交ぜてのけんらんの川柳大会は、 無鬼氏の優勝楯授与などを取り

クローズ・アップされているよう みたといら軽装で出席されたこと ある。チョイと市場帰りに寄って たことは、皆さんの質素なお姿で 選第一位を占められた) は、川雑イズムの一番よいとこか に思えた。(内藤きさ子さんが入 記事をとりながら一番強く感じ

では又、来年ね…… エピローグ

カメラ 森下愛

不二田一三夫

宿直の明日へ引継ぐのみとり粉 のみ取粉買らて下宿の灯に戻り のみ取粉役目果してはたかれる 合宿の灯も起きている蚤取粉 のみとり粉少い寝間を襲狙され 退院へノミトリ粉をゆづって来 のみ取粉撒いて客間の床をのべ のみ取粉まけば貧乏くさく見え 蚤取粉まいて寝たのに喰われてぬ 独身の夜長ポコノーのみ取り粉 のみとり粉らい臭と知って飛ぶ のみ取り粉仔犬ののみを追いつめる 大掃除こんなところから蚤取粉 のみとり粉いられ清楚な家に住み 差し入れへ蚤取粉も入れてやり 愛犬用だよと社長ののみ取り粉 余分だけ猫にふっとくのみ取り粉 登良朗清貴朗操美知 志 子子美子洲子子舟美 きさ子 葉乙女 ひさみ 満寿子 花代子 紅若

爪弾きに秘めた想いを誰が知る

爪弾きへもうこおろぎが鳴きはじめ

花代子 千代美

爪弾きへ抜は三の糸を下げ 爪弾きの二号今夜は来る機嫌 爪弾きは初会の唄をまた聞かせ 爪弾は炭坑節がや

っとなり

ひさみ

ひかされてから爪弾を叱られる 爪弾きで飲んで呉れてた人も亡し 爪弾きの二号が年を思う夜 雨宿り爪弾きの主にのび上がり

都詩子

気兼ねするけいこはそっとと爪で弾き

麻生路郎先生

その日までお元気で

ちゃっきり節 梨里・貴洲の諸氏 右より・被乃・瀬花

朝までの夢を見る気ののみとり

極大ののみ追っかけるのなどり粉 のみとり粉ひと雨欲しい窓をあけ

> 千代美 たつよ

いつからの孤独がさせた菊っくり多趣味です一つも物にならず老け 新妻の趣味ヘコケシが並べられ 卒直に趣味バチンコミ書いて置き 趣味一つ無き晩年を淋しがり お金だけためるが父の趣味だろか 何時からか慕しのたしになった趣味 趣味の域通りこしてる舞扇 女同志小さな趣味を可愛がり 子を死なしてからは夫婦で同じ趣味 い人趣味をおもちでなどご世辞を言 悪趣味に鼻つままれてるこも知らず 病んでからは変った父の趣味 味として習らた道で立つ不幸 千代美 きさ子 菜 選

同じ趣 古瓦大事 吞むだけの趣味へ話のできれ勝ち 趣味ばかり変えて通人らしい嘘 子が無くて夫婦の趣味のこまやかに 俳句趣味の社長で小使いまで駄句り 内職の詫びしさ趣味に遠ざかり 職りさしこれも矢張り趣 趣味いつか中年という好み見せ 風鈴に風あり趣味の席をもち ライバルに打つ祝電の手 祝電に又號声を張り上げる 下手くこな義太夫きかせるだけの趣味 味のない夫で庭も掃いてくれ 味人形射的で貰うたのも交り にもならず夫のコレクション 味そもく一恋の始めにて めた恋祝電をうちに立 F K へ祝電 何通ですむ盛儀 出した旅かばん 行を派手に打ちいな人に戻ぐみりぬ人に涙ぐみい人に涙ぐみ ねられている見合 先に着き 味やろか がふるえ 高橋操 12 なり 子選 富千香と阿花ひ星梨清清 士代 し さ 子美月代茶子み女花子子 若若良きさみ 東菜子子み里み 富士子 貴梨朗和朗花花 奈鶴 洲花子子子女美 花奈女 梨 花

妻のヒス夫は

٢

スの噂

高

うなり

貴ひ登若俊初ひさ おき 選み子菜江穂み

葉操 梨 貴 乙 子 里 洲

V

花奈明 奈良 女子美

子甫

ヒステリー

元せま

ヒスを又起したらしい妻の

古

ヒスル手も知らず本妻しなびゆき

ヒステリー

恐れて天下にさせておき

閉会になって視電またとゞき 祝電を層書順に読み上げる 祝電を熱海の宿で読み直し 祝電も熟の人らしく組んで来る おめでたい雨祝電も濡れて著き 金婚の父祝電を読み直し祝電を打たせておいた軽井沢 閉会になって祝電また代議士のとにかく儀礼とご 妻のヒス平謝りでけりを ヒステリーに悩まされ続ける同居人 娘のヒスへ親も縁談あせってい 三次会ヒスの事など忘れ 言わけを聞いて呉れないヒステット ヒステリー見抜いて猫もよりつかず 大臣もヒステリー夫人持て余し ステリックな返事も母ゆずり 兼題「ヒステリー」太田 いとする弱身からとなになり の事など忘れてい 黙否権でゆき と云ら祝 つけ 良 子選 たと美操和とふ梨花清千美美綾 つし 代代舟子子代子里子子永喜砂女 操若き梨千富和貴梨富 士 士 子菜子花永子子洲里子 男っ気無いのでヒスのせいにされ子がなくてヒステリーいまだつっき ヒスとヒス地球が割れるなど思 母のヒス子はもう別に驚かず恐妻家ヒスのたへりを知りすぎて 又戸気したかとヒスにつねられる 新妻のヒスはレターがもとらしく また何かこわしたらしいヒステリ ヒステリーも忘れて孫を遊ぶ日日 一しきり泣けば治るヒステリー ヒステリーの妻に二次会止めにする ヒスの眼に今日は静かな金魚鉢 ヒスの声背中に受けて靴をはき ヒステリーの妻で仲よく飲むこ決め ヒステリー向い三軒みな起 二号即つきとめヒスは狂い出 ヒステリーのスリルおはれた倦怠期 のヒス子供も手加減覚え込み 殺もら止め手がならてヒスつのり お世話になったヒステリー 眼鏡の奥のヒステリ

流世の 流行歌明治の耳にあまく 聞き校の歌よりうまい流行 流行歌どれも明治の節にな婚しさをはたきに合せて流行 カミソリも (軸)ヒスでない妻で栄転又栄転 一習らパパの音痴の流行歌聴くだけのスーパーラデオ買 歌通りの人生中ばすぎ 歌気の部屋からもれて来る歌家を稼ぎ自家用車を稼ぎ 歌身につまされる歌詞にふれ 歌いつち下の子 口痴も 流行歌 軽く流行歌にあわ 虎の巻 まく聞き よく覚え を出 内藤きさ子選 歌也 し歌 5 歌歌

紅梨 ふ花 一知清 と み代 恵 梅 花子子 栄美子代

ヒスの

妻もって出世をしそこない

ヒステリーともかくさわられここにする

人の娘気儘がヒスに変って来

ヒステリーの妻へ夫の落ちっかす ヒステリの発作は猫も心得て

初明和貴明富登和花鶴 士志 鶴 鶴美子洲子子子美

理屈では勝てぬ女のヒステリー ヒステリーだけは仲人云いをびれ

年ヒスの気味ありオールドミス

愛情が消えヒスが燃えは

じめ

ヒステリー俺の浮気がもとかいな

浮気する夫をもってヒスになり 奥さんは美人二号はヒスになり

知美千徳知た 恵恵 裏喜永子美

雑巾もひ 台所 雨の日の 巾も日々にやせま 巾で磨き上げたる からいきなり 歌昨日の歌手を 客 からびてい へ雑 巾 母 る倦怠期 6 出迎える す 子沢 で嫁 流ら行忘 小西 Ш きさ子 都詩子

富千貴美星 士代 子美洲舟女

きさ子

雑巾もかわいて妻はさとに居り雑巾が酒を吸うてる三岁く 雑巾が酒を吸うてる三次会替の雑巾も干してくつろぐ主婦の夜 がかけて 花を活け 学校の雑巾丈けはさしてやり がった る 客の前の あった 発力 は 中 手 を や すめ 雑巾で飯 雑巾が追 美しい子が欲し雑 こいちゃんで雑巾がけるせずにする 気分転換社長が雑巾 雑巾にすわ 巾の 1街のここはなまめく雑巾がける巾の巾へ姑の眼が光る 零を叱 が欲し雑巾さしてます 明ありて良 台もふく妻 ると娘 る二階借 かけてお 気前よし き日らし の留 5 会前 りけ夜め b b 結き美若花紅初た都きさ されていまさ 梗子舟菜子梅穂よ子子 花阿き梨梨一美 奈女茶子里里栄喜 清思美 美佐子菜

在・投句者・周甫・花鶴美・千永・奈・一歩・登志子・葉乙女・たつよ・美喜・一栄・登志子・葉乙女・たつよ・美喜・一栄・登志子・葉乙女・たつよ・美喜・一米・登志子・葉乙女・たつよ・美喜・一米・投句者・周甫・花鶴美・千永・奈・花・投句者・周甫・花鶴美・千永・奈・花・投句者・周甫・花鶴美・千永・奈・花・投句者・周甫・花鶴美・千永・奈・花・投句者・周甫・花鶴美・千永・奈・花・投句者・周甫・花鶴美・千永・奈・ 女・ふみ子・きさ子・操子・梨里・英子・貴洲・知恵美・潮花・香月・花奈田 路郎・葭乃・花代子・美智 良子・満寿子・明美・ひさみ・千代美

点、きさ子さんは、どの様に考え

藤ささ子 7 (女流作家訪問記20

丸 尾 花

をしていただきたいのですが」 せんが、今日は最初から旬のお話 は、何となく、親しみの持てる明 に和服に良くお似合のきさ子さん 藤きさ子さんをお訪ねした。洋装 「お忙しい処を御邪魔して済みま るい清楚な感じの方である。 会の幹事として活躍されている内 岸和田市上町三六に、婦人友の

定不変のものではなく、一寸見る だろうと言っていられます。 れている様でも、仔細に分析をす と、どの句も同じ形式の様に詠ま 申されます様に形式と言うものは いのですけれど、路郎先生が常に ですが、それは決して無理ではな 七、五、つまり十七音字を並べるの れる時には先ず川柳の形式の五、 すが、初心者の方が初めて作句さ が多くなった様に見受られるんで 「最近特に川柳を作られる若い方 ら」と、ニッコリと微笑まれる。 るとその形式が句の内容に依りま にお答出来る程度のものでした 「どの様な御質問でしょうか。私 般の方に考えられている様な一 っていることに気付かれる

く思っています。 りに詠んでしまいます。でもその 内に段々川柳の持味と言うものが ね。私は常にそうした作家を美し の心を打つ力強い物があります 箱庭式をぬけ出した句には何か人 私なども十句作れば元句迄形式通 式通りでないと作句出来ない人も 脱ぐ様にね。でも、どうしても形 にも成るのでしょうね。蟬が競か だわらない独自の境地を詠むよう 句も作られる様になり、形式にこ 有るのではないでしょうか。現に 解って来ますと、無理のない破調 方が形式に囚われるのは入門の第 ていられます 歩として当然でしょうね。その お説御尤と思います。 初心者の

りつつある様に思らのですが、徹 前抱逸君の句で ですが、現在は少しずつ戦前に戻 戦前の句会や句の事を思い出すん 私はいつも句の事を言いますと

を習い始めましたので戦前の句はょうね。私は昭和十六年から川柳 世の中が落ちついたと言う事でし の句を今も好きで覚えています」 (人形師腕で産めない娘を願き) 戦前に戻って来たと言うことは

角恋坊さんの句 とか東魚さんの あまりくわしく知りさせんが (渡し舟花やは蝶を半 れて乗り

(魔編み道場程の音をたて)

思いますが うたった句ですが、なるほどと思 さんの、人形師の句は鋭い皮肉を わせられますね」 「葭乃先生の句で戦に中だったと などを好きで覚えています。抱絶

と思いますがし 「そうですね。私にはまだハッキ と思われる方の句を拾って見たい が最近特に目立って良くなられた 友の会員は百名近くも居られます こし)も好きな句でした。 (なにがしの池のたにしを捕 IJ

リとお顔も判らない方が多いです 岸和田句会での知恵美さんの えました。最近のものでは友の会 ん、知恵美さんのお名前をよく覚 ら言う意味で苦菜さん、富士子さ 方の句には注意をしています。そ ないんです。唯私は矢張り年輩の し、句につきましても別に意見も

へごろ窓して獨身にすきパンに施 柳以外にどの様な趣味をお持 が印象に残っています」

> の星を仰ぎながら、素晴しい小説夏の夜おそく籐椅子に坐って満天 が好きです。但し童謡は戦前のも と、童謡を口ずごみ、また見るの か何か書きたいなしと思うこと 過ぎ去った昔を思い出すことと、 春の日か、秋の日に毎辺に坐って 思ってるんですけれど ながら感心してる位です。これも の事を申すのでしょう。よくまし ちでしょうか これも、やりたいとは思うだけは ではお好きなものは サテ何でしょう。お天気の良い 柳の一つでも習ったものだと吾 何の取柄もないデクの棒とは私

> > 古く年令にも支配されて来ますと てもファンはなくとも一応柳歴も

でしょうかし のが好きですの。まんこんなとこ

さんの

作馬代が思い出されますね。潮花

を配って参ります。初心目代の多 も知れないと思い一句、一句に気 やはり誰かに注目して貰ってるか

多いのでかないません。逆にお何 毛虫、私の家の近辺は特にこれが でしょうかし ましてね。何か健康法でもこるの るくくと言われる言葉を思い合し おられます事と、人々が若く見え の関係上毎日御多忙な日を送って いしますけど、潮花さんはお仕事 じいさんと、蛇、蜘蛛、なめくじ 「いい歳をして女を漁り歩く、 特にお嫌いなものは」

しています。ファンを持つ事は毎の大ファンよと言われるのに恐縮 月の作句にとても苦しも れよりも、きさ子さんに潮花さん 常に踊っているからでしょう。 えるのは、若いお友達が多いのと 気で押しているんですね。著く見 別に健康社ってないんですよ。 んで 2

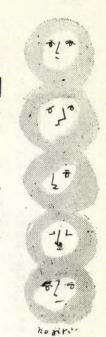
ん。でも何の世界でも自欠より上「潮花さんを苦しめて済みませ

作ばかりとは絶対に言えない事で 主ないからって潮花さんの句が凡 すし、そのために作句が苦しくな す。潮花流の基礎はちゃんと出来 られるのも確かでしょうが、苦し のひとを敬い憧憬れるのは当然で てるんですからね。私達にしまし

和田城を茜色に染めた陽か沈む頃川柳を通して対談の終ったのは岸 離れない好きな句でした だった。 はどうしても頭からこびりついて (は古屋の領は同子で叩かれる)

、訪問記終り





導

H 古 方

なものを読みます」と八月号の一 も知識欲を満足させてくれるよう 三頁にのべていられます。

魚殺す本に惹かれて黄昏れ

螢光灯読書の窓の美しさ

″紙魚殺す

粤

よいか、「燈」がよいか、やはり がスタンドとなればたのもしく、窓の灯は美しいものですが、それ がすがしくなります。「灯」が 螢光灯の白さが加わると一そうす 「灯」の方が時代的ですね。 読書する窓へバッタの体あた

ら句主は感じています。 深まる秋の中でバッタへの愛情す 平.

性なのでしょう。川紙魚殺す本川

けはなれてはいますが、それが本 よう、聖典を読む心境とおよそか というより、本能的に押しつぶし

に我慢が出来ず、本を愛するから か和綴の紙の間をはい廻わる紙魚 本川に行き詰ります。宝暦か享保

てしまわずにはいられないのでし

は仲々たくみな表現といえます。

螢でも読めそうな字の四書五

次官候補読書不足を指摘され

読書家が出世もせずに平社員 H

んですが、例の「蟄の光、窓の

誇張が利いています。 から着想された一種の詠史川

雲の功成り読書とも別れ

読む事は読むが世渡り下手な

進之助

我利婆

字が大きいというだけのことな

読書はすぐ空腹を満せるようなわ 水気の少い句がならびましたが、 八文銭

けにはゆきません。その点 浪人が二年続いている読書 榭

見宋だけでではなさそうな洋

めに時間を使うくらいなら少しで マ葭乃先生は「報道記事をよむた本も読みたいものです。我等のマ

す。 卒業は出発なりと時には堅い

本人はこれだからこまるので

他人にはどうみえようとも、 的だといわれようとも 淋しさは読書の眼籍が板につ 本読んで何も逆らうこともな 男

読書家の親父理論でせめてく

てゆけばよいので 綿に油のしゅむ如く、 自らを深め

思索して読書する高台の夜 桐生子

明け暮れを読書で山の療養所

体はむしばまれていようとも幸福 語り合えるということはたとえ肉 といわねばなりますまい 雑音を抜きにして著者としみじみ 十五年目やっと読書の出来る

ましたが、はたしてどうでしょう 書の時間が出来たという句もあり とさせられます。 かル十五年目やっとルにしみじみ 女の理想と現実、電気洗濯機で読 みちる

趣味読書お読みになるはこれ 本当に趣味は読書と云うお顔

酒

ですか 趣味欄に読書と書いてほっと 朗

すいのでしょう。水鏡子さんのは はなさそうです。しかし「読書で の二句は「でも組」です。 組」の方が川柳の題材にはなりや も組」や「論語読みの論語知らず 読書でも」の「でも組」ばかりで んざりするのですが、必ずしも「 「論語読み」の方でしょうし、他 御趣味は」「読書」では全くう

> でよく、文法からいっても「で」す。達意からいえば「で」は一字 いのでしよう。 の気持はおそらく一字では出せなは一字でよいのです。しかし句主 というような殊勝のも。 つ重なっている所が一寸問題で 見栄だけででは#と「で」が二 この句の

も読み 遂に読めず荷厄介だった本 ベストセラー人が読むから僕 どんたく

刊を総台へまで持ち歩き 八九寸 路

凊

灘 。魚 崎

大塚合名会社醸

もあります。買うだけ買うて「積クセサリーになってしまった場合 路さんの「縁台」は私もよくやり う。八九寸さんの「荷厄介」や真 ん読」というのもこの一種でしょ あるし、ほんとに読むつもりがア らアクセサリーのつもりの場合も アクセサリーになる本、はじめか

> 叱られています。 ハウスキーバーにいつもぐずく とおきっぱなしにして、ミセス、 に二三冊、こっちの部屋に四五冊 のを感じるのです。あっちの部屋 ますので特に共鳴しました。身近 本をおくことそのもので暖いも

にする ラブシーンすむまで読んで飯 読書する本に重ねたエロの本

っています、 うなやり方でなく、そのものをか 雪が何もかもをおくいかくすよ り、醜いまくのこったりします。 ないかで醜いものが美しくなった です。水こしのすぐれているかい いゝますか、水こしのようなもの は表現が問題です。芸術の魔術と させんでした。芸術となるために 外句数はすくなく佳句も見つかり っと作られていくと思いますが案 す。慾望の解剖をする川柳ですも に触れるところに問題がありま ともないのでしょうがみんなの眼 でいる分にはとやかくいわれるこ 陽族を連作している日活社長はい 映画を取締るなら本も取締れと太 ロ、自分で創作して自分で楽しん 映画のエロと本のエ

も出来るでしょう。古いところ くされる真理に焦点を向けること の一方法でしょう。 残して表現過剰にならないのもそ のでしよう。省略、想像の余地を さをあたえないのが表現の魔力な がらしかも、相手にいやな不愉快 くすところもなくむき出しにしな そのものにふ

学びとらねばならないことです。 術としてのエロテイシズムか、エ 俳句の方にだって昔からエロテイ りますが、川柳の世界だけでなく です、この表現力の蓄積こそ大に す、表現を支配するものは表現力 せん、要は表現の問題なんです芸 族」もの、週刊新潮の広告を見てい ロのためのエロかで違って来き ム」などと珍らしそうに書いてあ ますと「十七文字のエロテイシズ レー夫人の恋人」そして今の「太陽 そうでしたし、戦後では「チャタ では谷崎潤一郎の「痴人の愛」 ズムがなかったわけではありき

も金も我が読書欲について 0

T 書欲に我がねばり気がつい

として発表出来ないものになりま をこんな調子で句にしたら破礼句 撰択する力です。エロテイシズム います。「表現力」は「表現」を す、「表現」と「表現力」はちが す。表現はそのくせ過剰なので 正直すぎます、所謂表現力不足で になりますが、あまりにどちらも らないのが娑婆なんですから句材 後の句は我がねばり気がついて来 は時と金が読書欲について来ず。 分執心がおありのようです。前句 ないというのです。思う通りにな いて来ずれということに大

草 義

菊 沢 11 松 袁

様に次からく川 らか、一かどの川柳人なりと自負 蒻はそう毎日造れない そうであ とのことを聞いた。毎日毎日造っ して居っても、毎日毎夜蚕の糸の 来ない、川柳もそうでは無いだろ さえ本当のものはそうざらには出 って本当の崑繭ではない、形の上 蒻が出来るのは一年の内四五回だ 職人が本当に自分の気に入った寛 る。一見簡単そらに見える菎蒻で ても噛みしめて本当の味の出る草 て居るものは崑蒻に似たものであ 年中崑蒻を作って居る崑蒻屋の 匂いの上で、菎蒻に見えて居 の句が出てもよいのじゃ無いかと おいっぱ私のみの偏見だろうか。 戦後 のは私のみの偏見だろうか。 戦後 のは私のみの偏見だろうか。 戦後 のは私のみの偏見だろうか。 戦後 ろうか、句会でも柳誌でも此れが って行く様な気がして仕方がない は斯うしたものだと自信を以て万 が多いのでは無かろうか、川柳と 離れ無い様な句がだんとと少くな 本当の川柳だと悩裡に焼き附いて るだろうか、所詮川柳に似たもの の内、本当の川

おもう。御互の努力に依って当の川柳に似たものから別れて本当の川柳に御目に掛り度い、当の川柳に御目に掛り度い、当の川柳に御田に掛り度い、

のユ 1 モ

柳が何句

◇畳の下から出て来た新聞紙 た。大正末期のものらしい。 た。大正末期のものらしい。 「来る十五日、市電朝汐橋電 国女流飛行家に依る空中大飛 行公開云々」後は虫が喰っていて読めない。。 本 多省

幸抱で御座います。順々におつめ かテープレコードを通って響いて 水ます。御降りのお方は御座いま います。御降りのお方は御座いま で御座 います。では南森町南森町で御座 での内に「暫らくの御 でした。 では、 での内に「暫らくの御

りともせずに「すみません、今のいの、矢っぱり録音の調子やろいの、矢っぱり録音の調子やろいの、矢っぱり録音の調子やろいの、矢っぱり録音がある。 は私の声です。

大段なびしる 書 色 丹吉月堂 紙 空南 ナニー・セニー 用 短 品品 #

麻 生 葭 乃 選

課題二次会

(五)隅 五)二次会は二号の店へ連れてゆき 五)二次会よなどとぜんざいたべに入り 五二次会を逃げる算段する財 五)二次会で度胸がすわり三次会 人)二次会は逃げた課長をくさし合い 地)二次会へ廻り折詰忘 (天)二次会へ内助の傘も邪魔になり 二次会にしてもおそいと針仕事 っこはもら二次会へ消えており n て来 布 奈良子 千代美 きさ子 葉乙女 とし代 滑 俊 德

研究題「映画

発表) 十二月号予定 メ切) 十月十五日

投句先)

豊中市本町三丁目二〇

お供した二次会ながし 二次会の 小便に立って二次会すっぽ抜け 自家用車並ぶ二次会静 二次会へ来れば女も遠慮せず 二次会へいたとは書かぬ日記帳 二次会の声に都合をつけて去に 一次会で男の裏を見 二次会で磨きをかける旦那芸 二次会の車手前でとめさせる 二次会の帰りは虫も鳴かぬころ 一次会はなじみの店で顔きか 一次会へチトへそくりがたらぬたり 次 かけには二次会の事念おされ 会へ会計 流 れか客 别 な てしまい 0 高笑い 又楽し かなり 金 集 ふみ子 百合子 若 富士子 周 京 寿 2 美 例 [11] 白 J 子 稙 美

けむいのをまいて二次会はずをここ もめ事を二次会迄も持って行き 泣上戸送り届けて呑み な 二次会の席でもらした悩み事 二次会でも知らず上妻は喰べず待ち お茶の会からの二次会慎ましく 姑へ二次会秘めた門 二次会に折弁当が邪魔 二次会に上役が居て騒がれず 二次会に集り質ぶれ決って居た 二次会へ来てこわい顔思い出し 二次会の 二次会で妻に内証のかくし芸 二次会は膝 一次会 0 踊 割勘 を枕に寝てしまい 娘になろたもの 妻 へ言訳し を開け になり 都詩子 登志子 花鶴美 たつよ 花奈女 満寿子 阴 芙 星 綾 美 文 女 女 舟

転居する質屋地図まで書いてくれ

実

男

住

)闇屋へも転居通知の抜かりなし

代仕男

いて恩返

葉

光

恵二朗 牧

人

へ風鈴だけ

を残

しと

転居先隣り一向知らぬなり 転居する人 転居して窓の景色をうれしがり 特製の犬小屋を持つ 転居する度に 号謝しに 今一尼斯 居 精 して思 した先には先の風 した当座を猫は縛られ (1 なったと転居 菊 からの 自慢 庭の植 V. る げたい転居 Y 25 わぬ人が訪ね ないのが二三人 へ悪口 退 當 は鮎 料 一人ずつ 噂が派手になり 木が惜しくなり 0 0 古艺艺 なお Ł 転 通 排 酒 居 知 かる て来 6 C 続 生 呉 败 転 0) 好 3 ず 4 居 味 3 1 3 静観堂 恵二朗 忠 一有圭素恒光 可孝 維 実 静 水生雄郎 4 信 年 路

(住)転居して時計は昔のままで鳴り

(佳) 二号さんなっさり転居思い立ち

忠二朗

画家と云う看板ほどの画もかけま

芸術と云いつムヌードはかり描き

家脚光へ尻立向け

入選の画家前作も売れはじめ

窓

住

)画家の眼にうつる夕陽がものたらす

女流画家モデルの美貌へなが心 有名な画家で庶民に親しめず 西家は西家なりに裸体を見て帰り

十九平

純 高 恒 光 滩 晃 祥 春 定

声

志 維

たいく

(住)看

板の下画

細 々暮

して居

香 美

舟

代仕男

薬

二朗

転勤の度に小猫をとまどわ

せ

舟

(佳)丹精のトマト転居へまだ青し

往

)転居して朝日はこちらから上り

7

アトリエが立派に出来てよう描かす

家的

魂

K

狙 to

実 菊

里

(秀)モデルもら画家の視線を感じな (住)ヌード描く夫の若さらやぶまれ (住)入選を信じるモデルに励まされ (住)大胆なボーズへ画家の瞳がまごも

)貧乏な苦にせぬ画家が売ればじめ

を描いて何時しか年をこり



轉

居

凡

Ψ. 茶

あさらめていた子が画家でなって売れ

忠 忠

画家の妻墨をするのに気をっかい 大道の画家割り切った似顔かき

帝展を夢見た果ての 似顔 画

t

 \equiv

家になる腹か家業を振り向かり 家になるつもりが掃除はかりする

晃

落書のようにデッサン描きなぐり 芸術院なんと画家の多いこと 自称画家義理の買手がたるばかり

須賀太

生:

幸

路

微

酔

同 香 ٢ 薬

H.

1 1

13

4:

N

庵

選

路

引越しと知らずに鶏は逃げ廻 仏壇を転居のたびに持て余 不義理するつもりか新居の地図も無 御近所に泣いて貰って転居する 妾宅も乗物も良い転 借金を転居してから思い 転居へ選んだ大安が雨 転居地の海の色から書き始め 転居先二号には先ず 大掃除までに転居の日 生の終点と言う転 な 知 ٤ 居先 定 居 出 6 な

25 先

光 Ш

ン坊

林

又産れ遂に 借りのある奴が近くに越して来る 転居先やつ 転居してみれば此処にも馬鹿が居り 転居して里の清水を恋しが 役人の転居へ近所の眼が光り 転居にも慣れて停年近くなり 転居当座郵便さんへ礼を言う 転居先運送屋にも口止 転宅におしゃべり忘れず持つて行き 転居してはるかに幸福祈り合い 転居して言葉遣い ばり蚊がおり蝿 転居の まで変 肚を決め めし がおり 十九平 万古人 美 同 辨 藤 祥 春 維 同 高 波 月 声 休 3: 志 維

惜しまれて発つ引越しの人だかり \$ b L 七 白猫児 天 湖 初 庸 也 甫 (人)転 (地)また転居かいなと猫もあきれ顔 (天)転居して矢っ張り同じ向きに寝る 居 先尋ね歩 曲

家

悪口も云うて漫画家よく稼 パパは画家ママはピアノで折れ合わず 手も足も彩色してる豆 ŧ 裸婦素直絵筆の思うまくになり カンバスに向かえば画家の気にもなり 漫画家へ世相絵になることばかり 金の一る間は絵籍採ら 飲んでいる酒の値段も知らぬ画家 先生と呼ばれる画家の不精ヒゲ 落選をモデルの妻に支えられ 宿賃の代りに屛風描 個人展観光の時期見逃 入選もしたと田舎へ画家が来る 近所の 家らしくない頭髪で選に入り デルもう疲れて画家も喫いつける 家とまでゆかず図画の教師なり 噂の中に画家夫婦 1113 いて発 82 美 さず 画 画 伯 ぎ 家 笑 八九寸 万古人 狂 井 庸 牧 雷 1 木 静 五. 贵 可 選 山坊魚馬茶美 月 風 作 佑 1

銭湯に行くにも画家のベレー

豊艶なモデルへ画家の無表 ハイキング画家もカメラを持つて出

画家になるつもりが露路の裏に住み

郎

4 康 月

家若くモデルの肌の白すぎる

ずらりっと画家の卵が描く天気 青絵具塗りも塗ったり豆 感覚へ枯木も画家は見迷 画きたけて画家ゆっくり湯にひたり 不景気が続いて絵筆捨てさせる 本職の画家では食りてゆけれなり トリエは個展のような画家で老け 画伯 2 夜 辩 主 有 祖與堂 飘 潮 水 子

ぬと警告の鐘を打たれた。

3席題が終って、きょうの特別番

じで訓練をもってする略画よりも素人目 な絵を生むことになる、それは川柳も同 筆さばきの妙はその筆勢によって、立派

によろこばれる密画に、自惚れてはなら

枚の鯛の略画、密画の鑑賞眼へ一転、略

は素人目には徹迎されぬが訓練による

する心構えをもてと熱弁をふるわれた。

路郎師は、梅里氏から誕生祝いにもら

、鯛の話から、師の描くところの二

の重要さを説き、一句にまとめて表現す 渋柿諸氏の作品をずらりならべて、下五

時、一歩退いて出来た句を検討し探求

秋、晃、雅巣、英断、我利婆、奈良子、 近作柳樽より薫風子、ひさみ、省三、満 いのちある句を創れ

ある、優勝権をめぐる特別課題



本は宛
本は宛
本は宛

本社八月涼線句會(天阪市) 投稿規定

八月七日

午後六時 光明

れ九時。

とかっさらら、

すことになった。寄贈、黒川紫香氏) の大短冊形のベニヤ板を会場正面に吊 (本月より題、選者名の幕は一間有余

佑・勝春・昌子・潮花・栗・涼一・梅 わを・梅里・貴山・瓢太・進之助・庸 愛論・立児・三十郎・晴雄・没食子・い 子·生々庵·井平·文蝶·賀峰·幽王· 多久志·好郎·水客·紫香·香林·薰風 馬・言也・省三・利武・堰子・アート・ 十悟・萬楽・喜仙・文秋・玄武洞・静 三夫・茶仏・淡舟・一乃字・晃・古方・ = 路郎・東洋男・須賀太・

恵二朗、梅志、万古、麦太楼、ひか平、

水客、潮花、春巢、白香、七面山、水堂

か――。本社の句評陣に光彩を放つ清水 ぬどころ、涼線句会の看板に偽わりなし

一色の会場だが白扇の波あまり立た

柳子氏は、八月号の川柳塔より鋭々、

精進料理 麻 郎 選

精進料理食道楽の果ての普茶料理愚僧愚僧といゝ機 精進料理仏も蛸がほしかろう 坊さんの料理な酒もついでくれ山寺の料理へ纏詰そっ と あけ 精進料理アブレはソース探がすなり 見くびった精進料理の高らつき 何処となく精進料理の様な人 遺言へ精進せんでもよいと書き 膳を並 味嫌 古三路 仏志

郎師披講の最後の一句、堂々古豪連を尻 け加えられた。兼題の披講も次々進み路 とがわかる。この時にも、句会出席率の 目に新鋭师須賀太氏が不朽洞賞杯をサッ 関を突破してゆく姿をありくく見たと付 多い訓練づけられた人たちが、予選の難 つりごの発表があり一喜一憂のらちに篠 支部の小西無鬼氏が覇権を握られたこ 正に涼風一陣の感、時こ 精進の味ちと足りぬ精力家 蟬遠く精進 雲水へ来ても酒さえあればよし つくましく精進料理でもてなされ 精進と熱い茶がよし の忌に母の思い出 |藍の廊下幾曲りして箸をとり 進料理母のお盆の灯に 進料理不肖の子等へ冷えている 能料理ですりと或る日の女房云 料理皆んな同んなじらの残 料理が運ば ごま豆 老 坐 n 夫 3 b まゆみ 知恵美 いわを 生々庵 省 万

莨蒻の刺身というのに恐れ入り 通り抜けの寺にっれしい普茶料理 本尊にお尻を向けて普茶料理 精進料理も5二次会を考える もう年か精進料理でもと寄り 帰化したが精進料理へ親しめず 黒川紫 季 須賀太 多久志 路 网 èls.

こんなのが命取るかと顕微鏡 顕微鏡博士の卵がひしめ 耳あかを確かめて見た顕 顕微鏡或る日の陛下が僕はすき 蛔虫が俺にも居った顕微 顕微鏡なかった時でも長生 微鏡笑って見てる他人の 人を恐れ入らした顕 微鏡 虱の足の 效 幾 微鏡 微 H 鏡 b 菌 仏峰平子志茶悟

> 顕微鏡本当の事を云う 顕微鏡らるさいものに 微鏡すねてるように覗いてる つもり 郎選

失業の果ての別居だとも云えず 倦意期だけど別居を 週に一度は会おら別居也 切れず いわな

別居でも結構ですと親が惚れしびり切らして電話 した別居 年 顔 見に来お芽出度の別居毎日 顔 見に来 別居してからの化粧が厚くなり 別居して親はやっばり有難い 別居した感じにも似て旅の 何んや彼や別居させたら取りに来る 俺も無理云らたと別居して悟り 里帰えりと云う名目の別居する 今頃に別居している子沢 別居許さず二号とも手を切らず 別居したワイフの方が儲けて居 感傷に耐えて別居の荷をまとめ 別居する相談ここにも右派と左派 別居でも同居でも嫁きます嫁きおくれ 別居して文通だけはつづけて居 別居には慣れていますと火を起し 栄転の別居を要は不安がり あと釜が出来て別居の肚をきめ 別居した訳が子供にわかりかね 兼題「打水」 好古阿梅生晃文静文利 郎方茶里庵 秋馬秋武 水 川柳堂 一三夫 言 秋馬秋武求林香也

打水をして打水をして吞屋ひま打水の凉し さ母の 肩を もむ打水の凉し さ母の 肩を もむ 水打って小さく属寝する秋の庭へもてなしの水打ってくれ 打水をしてから西瓜割ると決め 水で明日咲く花を 数えさせ 川一凉好三柳ン十の郎 十淡昌百 一郎郎悟舟子草

顕微鏡もうすぐ博士に成る目っき顕微鏡のぞいた丈けで手を洗い顕微鏡の

看護婦もちょっとのだいた顕微鏡

顕微鏡花火の音がひ ゞい てき

化学する子といる母の顕微鏡

薰水潮愛狂

醜男に生まれ顕微鏡に取組む気顕微鏡のぞけば夫も医者らしく

顕微鏡に俗物が来て茶々を入れ

汗ふいてあげよと子供背へ廻り生きる汗拭き/~炎暑上衣着て生きる汗拭き/~炎暑上衣着です。 見せ 病人が汗を 打水に今宵待たるへ荷が届き打水に今宵華燭の灯が映える 汗引いたあとでゆっくり詩を吟じ 打水へ虫もそろ! 打水の雫が萩の葉 打水の音へも足りて 打水をよけてリンゴがころけ落ち 水打ってたんまり儲ける塩を盛り 店番のあ 風鈴の裾 水の 水をする間に月が雲に入り 水に蛙 発のもう出たらしい水を打ちがへ虫もそろ~~鳴く 仕度 が水のおこぼれ金魚目をさまし 水のはだし勝気な娘 水のしまい八ツ手へさっとあり 水の 水で蟻四 水をする猿又に穴があり 水をピョイ 水 0 0 ホースを踏んで怒鳴られる 緑で 滴りに立つ妻揚枝 逆らら様 いでの 3 打 て半 御魂を迎える宵とする 汗 で道 水に び打 かいてる物 五尺を流される 相場 ピョイ八頭 杓で犬を追 を教 0 K 欄をよみ らさ を 梳 通り つたい に育ち え近し えられ ま を待 身の 本水 好飘幽生一十 郎太王庵字悟 没食子 王 白賀柳峰 知茶菜 恵 美 仏 客 白栗茶紫梅潮十玄瓤没潮 水 仏香里花悟洞太子花 水一飘客字太 きゆみ峰 梅 文 1三夫 梅 水愛 選 里 里 里

アイロンの汗を姉妹入れ替油紙では厚化粧持ちきれ

b ず

勝万茶

立話お酒

の燗は冷えている

答三秋 仏志庵

ほころびを終

車ひく母の

立話だいぶんもめている様 立話結局あんじようおごらされ 立話アロハの方はキョロへしし

子

多

生

文

太蝶

白

柳子

舟

2

油紙では厚化粧持 汗臭いシャツで芸妓と野球け 優勝のカップは汗の手へ渡

汗くさい臭もしてる人間史 健康な汗シャワーで吹き飛ばし もうあかんという顔汗を拭いている

ルの手休め揃って汗をいれ

水古

答

下駄すげ

7

貰う間の立話

立話チョイノ〜声が小さくなり 立話なんだんねんと無理に入れ

立話借りてるほうが肥えてお

0 L

0

借りの礼を言

話子供に袖をひっばられ処も又クイズが出てる立話 話どこまで女閑なやら

背の子を落すまいとて父の

冷汗をかいた話を自慢

VC

是からの仕掛花火へ子に寝られ大阪の花火が見える窓の風大阪の花火が見える窓の風然をおびやかすように遠花火密談をおびやかすように遠花火 振りかえる花火は川へ吸い込まれ ビヤホール土産の花火少し濡れ人ごみをさけて二人で見る花火 アベックの話花火にちととぎれ 花火屋が近所にできて保険増し花火屋の前で動かぬ子とはなり もら寝さすつもりへ花火が又揚り 面影を闇 何や知らんが朝からせわしない花火 せがまれて親が遊んで居る花火 花火 にとらえた揚花火 土井文 玄万文晃十井省香万勝 武 洞楽秋 悟平三林楽春 蝶 水万省好 乃字

立話荷を持ち替えてまだつゞ

言古

つか

ず

(いさむ

理

用片づけて来た立話へと日かげへ廻る立話雫たっ てる 市場 籠

みくずでも吞むかと寝汗案でられ 帯解けば舞台の汗がこぼれ落ち 汗かいている昼寝の子を裏がえし ダンサーの背中へ汗へチップ代 汗かいたんだ不労利得ではないぞ 汗入れて集金屋さん又スター ぼい鼻のあたまに汗かいて いにする 汗 b L ず 没食子 須賀太 須賀 省万淡 古十凉潮幽茶 没古省生 食子 女庵 三楽舟 方悟 きっかけがつかずだらく一立話 早打ちへ腕の白さが浮いて見え 路次裏の花火馬穴をそばに置き 警官もすりも見上げている花火 子の花火日の オール漕ぐ手がふと止る遠花火 寄せる丈け寄せて花火は待たされる れた子が迷い子になった立話 話女に過去が多 一階から見える花火へ人を呼び 人も窓までほうて来た花 居ふと佇んで見る川開 V 7 知らぬ同士の立 何か 立てられた立話 暮れるのも待ちされず L すぎる い立話 丸 話 3 潮 花

好水狂紫

僕の顔

郎客

幽

二香王

お絞りへ二十の汗の香

を彼女に悔

V な

6 移 交叉点ボリスの汗を 見

て曲

\$

世

青

玄

武洞

雜川 淀川支部句会 (大阪市)

木村水堂報

篠山支部句会

(兵庫県)

小西無鬼選

野下の泣き声今のつれあいさいがよりなとなって、 とを後悔した枕の間へ置いてやりたれがないととを後悔した枕の間へ置いてやりないがあれたことを後悔した枕 旅日記小さい秘密には触帰りにならぬ枕のたい は触れず 凡毅豆

阿倍野支部句会 (大阪

市

小松園選

要銭も上げずにひな型書きたぶり 御祭りのたもとで花火取りかこみ 御祭りのたもとで花火取りかこみ 間をしせめては妻と祭り 両もよしせめては妻と祭り 風邪気味を叱られ乍ら祭りの子 糸の無い三味へほこりつらって居 がぶと虫ひっばる糸がびんご張り かぶと虫ひっばる糸がびんご張り かがと虫ひっばる糸がびんご張り かがと虫ひっばる糸がびんご張り 祖母の根気におそれいるを縫り糸孫に通させてく 母 の 影 年 思 ら 清井朝草都梅透風登白六梅葉—— 詩 子平路白子志水間子子子志光栄声

玉 造支 部 句 会 (大阪 永田 六竜子報 市

玄武洞

選

虫干に享主出前を食わされる 虫干に足が生えてるカクレン坊 虫干に足が生えてるカクレン坊 月給日ネッタイ派手なのを締めて行き捨てかるネクタイで来る安定所 を恨んだこと もありつけのまんま持出される 三千山礼東水文水 十 茶 洋 郎 鶴花司男堂児茶 不自由な暮しで人格だけ守り 狸寝がばれたか蔭口小さくなり 観守番は子供押売りすっと去に 椙 原 善 桃鳳香二 選 里月春路

倉敷支部

句

(倉敷市)

して散会し

谷川の音に山彦吸いこまれ 「はな会ヤァお達者ですかとは淋し 大業へお達者ですかとは淋し 大業へお達者ですかとは淋し を著でさえいればざれの顔の艶 達者でさえいればざれの顔の艶 を書でさえいればざれの頭の艶 を書でさえいればざれの頭の艶 を書でされれる翁の顔の艶 を書でされれる翁の顔の艶 達者なり 口 露ほども人 疑わず 派手好きはダリヤの様な恋なった 気のぬけたビール残 決めかねた浴衣の柄を見て貰 裃の様な浴衣を妻が着せウインドの浴衣へ女すねている 谷川へ冷やす麦茶へ 女代議士達者な口でまくしたて 派手に抱くダリヤにきつく照明 仏壇へダリヤは気前よく切られ どら転んでも露の丸さを失わず 豊年の予感初穂に乗祭無事済んで夜露に高い 露踏んで明日の 露 の切 同支部福圧グループ ~ 養子 んで夜露に濡れる山 步 人 n 野次を押えて弁達 も八 そこから 0 黙々草 ま 八丁手 ースへ整 3 がれた引き 凮 ま T 。だ綺 のが来る べっ た露 を 6 引返し 0 XIJ 1 える 冴 不 丁 者 車 益初千よしませる 偷處梅実 多空 可洞子世 文薫飄哲左一文柳杜三越英 文 子 太也字風子常的枝山断 千北水ひ白 枝 が猫 子路客平児 須 凡 隅 太 倍 邓 雨鬼

京都支部句 会

大聖寺支部句会

(石川県)

吅

複雑な家庭とわかる綴り方酒宴もら人格なんぞ云らとらず

にく

る

れ覚投

美しき脱みに負けまい酒にがし脱んでる瞳がぬれて来る諦める 一根 は 滝に 紅 潮 す地獄へは行かぬっきりの今日を生き 色事を面倒にした金梅干がきらいで困る患 梅干を干す茣蓙を廻って郵便夫 介をばウチハでかくしぐちを聞き < 伸 は 一のことと 美 L V 甫極晴秀亀紫き鳥九紅白 三堂芽徒一蘭ぬ雀角寿扇次

田 中島 雀

人好しが美談となった通夜の席 広告の嘘につられたお人好し 広告の嘘につられたお人好し 風鈴や人来て傍に立止る 夏座敷ビールの追加の客があり 東干も華やかな方は窓に掛け 放げない娘へ先生の多すぎる酒の味おぼえて友の数が 殖え お人好し無理な寄附にも合点し 薄化粧しても見る気の病み上り してシャンソン聞き流し 野 ひ味武 平 光俊昌 選

品質優良

TACHIKAWA PEN

カワピン

カワゼム

タチ

郎夫男よ羊石徳雄雄

度の強い眼鏡斗志の程を見せ 田屋りのない子へ物思う日が続き 物思い三十五日までの後家 物思い三十五日までの後家 物思い三十五日までの後家 いささかの悔を残して日帰りし 日帰りを雨が嬉しく狂わせる 日帰りを雨が嬉しく狂わせる 立読は目録だけに目を通し泉都もら朝湯の気持で非番風呂 濡れるまでの生涯でした紙コッ捨てられて愚痴もこぼさぬ紙コッ ビール一本紙コップのくたびれて日帰りの旅へ一家の笑い声 敗けたけど斗志はあったとほめてやり 健康な主婦洗濯機をあざ笑 数 えられてる衣 なぐにぎり の字がよられ 更 ブ ブ

谷春五一十不麗風ま明銀承笑流平万飴真隆桃美 九二 のり 水日茶念善一郎水子子心子平雷風平坊坊奇文坊坊

聞くだけは聞いて本当に寝てしまい 水道料払い忘れて転勤し人格はともかく金で市議となり

飲む話狸寝入りが妾宅は少し遅れ

\$

L

吞蘇茂九里 喜 坊人美平子

呂平子 なみ

かうたる

出勤な

勤の近く寄附

達光司成一藤吐雪戌伊四 理三 夫夫楼夫規郎泉峰智男 柳吞天坊 侃達光司 Щ

牧帳吊ってからの思案が眠ぐなりを妻と歯のないままに通じ合いがままに通じ合いがないままに通じ合いが表上りはぶらり/~と追越され 土 井 雷 山

泥酔の底で淋しさふと感じ ・ 地際を守る辞表を叩きつけ ・ 神際を守る辞表を叩きつけ ・ で表を叩きつけ ・ で表を叩きっけ 純潔の恋 純潔を捧げて悔いぬ恋心縄張りのゴミ箱を野良犬見で廻り 処女か非処女か口を割っない月見草 犬猿の仲だったに死 孤児の淋 妻の背で見 出してみたが淋し 惚れと知 恋 光送る淋し L 支部 を十 さ月へ 句 代軽蔑 6 れば淋しかり ベッド 10 星 (岡山県) の月 1 目夜 正久麦法 米太 一維楼院 七笑青喜葵美千只幽承喜陽鉄賤 報 面 山雷柿楽邱舟年世谷平枝子吉女児

下関支部句 会 (下関市) 石川侃流洞報

雑川

天井を睨み矛盾をゆる

弓削支部句 会 (岡山県)

大阪市里区常餐町一丁目十一番地

立川ベン先株式会社

雜川

直原七面山選

やんわりと団扇で叩く きも知り 枕蚊帳気にして走る市場籠 を要の買うてた株が又あがり 変瘦を笑う大家の太皷腹 を要の買ってた株が又あがり を要の買ってた株が又あがり を要の買いに悔ゆる夜を過し 本数帳の匂いに悔ゆる夜を過し 運輸と思うて尻に敷かれとき運動の開ける方へ小屋を建て 汐風に名残りのテープ切れてゆき 唇を噛んで帰りの 見てはいや一糸纒わぬ湯上り上 寝て待って運は出ないに知る五十 念仏をおげて不運 入社した時のネクタイ今も締め た音に追 女の留守蚊帳の吊手にちと迷い人画の団扇がもてる 男子 寮後 が土 用鰻 で腹を さげ 雜川 勢は自分で開くも 1: 叩きつぶした蝿をきたながり 者からあるか無 の蚊 りへ視線斜 に団扇を出して 今見た映画のような月とんと来い空は鰯雲のバスにゆれて帰る夜の底がった。 かんじゅん きょうしょう かんしゅん いんしゅん と来い空は鰯雲 を打って蚊帳を吊り 取 嫌 支部 米若 もあっ 龙 をもら言わず 上り しかの 艾 0 2 な肘 か 尼綠 (鳥取 を浴 大西八步報 (出雲市) Z 市 助 陸 玉心 と多哲伊 も賀 な 魚 観 酢 子雄 郎野 九平 報 和

雲岬代美 仕 平月男好

仲人の親身の世話が行星一椀の世話を忘れぬ恩石一碗の世話を忘れぬ恩石

水江窓

が 関の手入れと人の世話 でいて、定の職もなく の手入れと人の世話 な忘れぬ恩返し

話好きでいて一

手不足の癖に世話役買って出る 単立つ鳥世話をやかせてみんな逃げ 単話好きで又肩書が 一つ 増え

閻魔陽拝い斧虹 魔花 つ 王麗炎山生平橋

話人と云う名で詫びる

築山快夢起報

ワイ支部句会

つハワ

1

残業と決めてネクタイ取りはずし 十代の落書 親を あわてさせ 十代の落書 親を あわてさせ こく 意見より母の涙が身海越えただけで洋行場 ネクタイの渋さ女を口説 反対の意見私憤も含ま 予想した馬が借金またさせる 当るかも知れぬクイズへ夢を持ち 意見される方が時勢を解いて居る 新聞の予想がガラリと票を変え ーネクタイビールの泡も亦たのし 春の海」作者は雲の上 雑川 見も張があり 一で聞き く色 せて (日湖茗耕遊三喬愁星満斗粗

廣島支部句 会 (広島 市

北

子沢山二枚の切符で 座席 とり中折帽切符をはさむとこにきめ中折帽切符をはさむとこにきめい 手 強 二 枚 疑われ 今干したばかり時雨へ腹を立て 枚のキップ 雨もらしぐれの域を超えて降り 一振に取られてバット口惜しがり 等とする夜遊び金魚などすべい 査水打つ 一人は顔で 凮 3 がり 乗 弘半 b 自布旋男 休 てるじ 半自 自 上越微 季美 然利舟酔

> 親馬塩の世話は死ぬ迄絶えれなり 好い嫁を世話し金まで借りられる 世話好の夫人あちこち駈けめぐり婚にする野心もあって世話をする 世話事がすぎて近所で疑われ 見のがせぬ他人の喧嘩の世話もする 世話になる嫁に好かれて長生し 世話好の妻で洗濯いつもため 馬鹿にして居た後輩の世 風呂を出て世話になる気の牡丹刷毛 話好きが取 沿持つ 縁 0) 話になり + 組 快エ銀浪周旋柳影草鈴 夢ス 之 法一 起子水助防風葉師郎子

满山人民星步水洞影穗庵粒惠

生川支部句会 (滋賀県)

失言を知りつつ強情押して見る と言を知りつつ強情押して見る と 遺 い上る 母の 膝 時計 臓時計見い見い子供の手術待ち 臓時計見い見い子供の手術待ち を言を知りつつ強情押して見る 咳払いして 失言が取消失言も座興となって会議 中 すみ 島 可 春美柳夢迷可俊喜木 報 巢秋 月生羊十子遊人

宇部支部句会 (字部 市

他人事と思えど気になる二人連れ 総務手になさいと女房すれて居り お勝手になさいと女房すれて居り 今つるが切れて二号の逃げ言葉一年生の弁当箱が鳴って来る 悪弁でニコョン今日も又あぶれ 二人連れらしい吊革ゆれて居 蝿一匹男 一人を寝せもせ 身勝手を詫びて遅参の猪口を受け 先輩をもの知りにして酒を酌ぎバチンコと言えず散歩ご軽く逃り 御先へ味を見てしま 秋 六 六 呆 哲 粗 実 箔 錦 風 雪 天 仙 雪 豊 青 柳 柳 花 鴨 二 影 男 川 花 柳 子 作 堂 峰 年 水 花 選

> 雑川 高知支部句 会 市

香水の包含二次会朝になり香水の手紙何度も読み返し 風邪気味の鼻が香水選りまわ 姉ちゃんのお出かい香水イヤッシグ香水の匂う扇子が隣に居 香水の美人へ乗り越ししてしまい 香水も無駄でなかった人に逢 香水をふれば逢びきかといわ か 西 b 6 迷 窓 寛英純素 太郎志有 由耕 爽清 選

雑川 松江支部句 (松江市)

アベックが見つけた雲は美し 石地蔵背でキッスの音を聞い キャンピング雲に行手なきえずられ雲が目につき腹が減ってくる 親族をみんな帰して父が 勝ち戦き男は腕で泣くもの 鶴の港に響く男 のそれ者と 知っ たアクセント 勝谷山川児報 拉拉 # げ 京 45 四祥 遷 綾山 与重 可 三 郎 別根 別根 男 児 子 児 一 人 朗 波

香水は床屋がつけてくれるだけ 四畳半君の香水 は へ ち か ち 香水の 匂い 人形へ も 分 ち 香水の 匂い人形へ も 分 ち ま行にとんと縁なし 我が 暮し 銀行にとんと縁なし 我が 暮し 銀行の電話手形りますと銀行の担保の蔵にさすと 犯人と知らず行員 送っ登を知る銀行にとんと縁なし我が表ししまない。 ない オフィスにゅかし君のローズの香急停車香水の香にぶち当り 人情に薄く銀行の得意が増えるい」女 もなき銀行なるもアル バイ 夕 出山し 1 蘇俊迷己松俊東庄蚊温梅 あ久松義 養郎洋吉市夫林子平風生子生子長

病人の身なりで変る匙加減金の価値がわかる医者の匙加減 、よりもパパが上手な匙加減 値がわかる医者の匙加減 佐野白 水選 登耕孝

大阪逓信 病 111

惑星と言う折紙をつけられる 少女もう母の苦労がわかりかけ 転落へ一歩少女の置き手紙 病人の氷の横を借るビー 楽し目で見れば楽しく見える星 お下げ髪姉の好みにいじられる 母心配が一つ増え 左玲栄土康千一 千 子羊子秋平吉坊

花売りの少女一人前の領

おしゃべりの少女職もよく動き

本の便りが母を強くする 本はとけても悠江子の

٤

子 帆

美汀

樹

本の 本の扇

便りが恋を又つなぎ

ケー

子で育った浪

舟朗蟠福政

転勤がやすいおでんやもう見付け 匙投げたはずの息子に仕送りし

蛇面隊

本で酔らた振りしてさかって見

本

砂

HJ は

命

から

匙の味見々々で減

-

ち

京

おそれ人ることも心得裸なりはだか随筆砂糖に蟻のつく様に

同同

ゆかたにもピカソマチスが並

10

浴衣がけ岡

目八目

腰

*

据

単位だけきっちりとつてマンバイト

得裸

柳会 沢 史

美人です矢っ張り血筋争え 不細工だ妻でよかった記事を読み あの美人子供一人のママかいな コンクール長屋の美人探し出し 落選がミス準ミスを抜いて嫁き 事着の中に美人を見付けたり で美 人人振 b 向 かず

333

階段降りた飯

にらみ

子で

杀

村好

郎

出戻り二一番凉しい部屋取られ 出戻りへ社長の食指ちと動き 出戻りのジャズへ近所、耳が寄り かめへんは人の噂も七十五日 義望の嫁が三日で帰らされ 戻って個性の強い かりの 海 電 腹 鉄川柳 かる 噂のまた 顔 会 1C (大阪 なり 八淵貴 市 甲一花好 子 朗平車施 14 のぼる 葉乙女 九州男 与呂志 好贵圭 水堂 好声 郎郎山水月

くる~~と団扇廻して聞く小! い、風があると団扇を持って出る 七夕の団扇の先の夫婦 怪談をうちわで叱る夕涼み 一衛の宵を団扇で呼び込まれ 0 同扇 揃えて子沢 星 b 厨 言 花鶴美 奈 事 千 良 子 平 年 綾 女

顏顏顏神 ゆかたにもニュールックとて袖を切 夏祭り親 祭まで待てぬ浴衣の 面会室では PTA义寄附 七夕の星に妬みの目 七夕の笹でにぎわら 七夕にてるてる坊主も笹につけ それぞれの夢七夕へむすびつけ 七夕に橋も架けたい天 ダル 祭故鄉 親は裸で子にかざり マ 興 川柳 出来ぬ の西瓜も久振 は汗の波にい 金 会 0) 躾 事 を凝らし 出 でも 寒長屋 国雲市 取 5 b b や記録権 星栄清吞柳東雲女郎太天太楼 兄々克摩 大工忠郎 軍白虹香館南三出 治 菊路車平風文雲

添乳する母の団 貸せば螢を捕 扇の静 かな えて来 丸尾 潮 花

たまじやくし句会 (大理 市 選

なんのアルバイトかしらんが着飾っ 候補者の顔は知らないアルバイト アルバイトうちも学生居るで買う 梅 水

もてなしの積りか裸になれくこ 裸踊りする酒癖をきたながり 生々庵 同 代茶伸

志晴山

裸にもなれぬ位に萎びて

骨体美ですと裸によう

(大阪 市

蚊帳ひとつたくみ残した夏休み夏休み学生バイトが掃除に来夏休み寒に電話よく掛り 夏休み高校生の薄化粧夏休みさっぱり家は片付かず夏休みさっぱり家は片付かず夏休みさっぱり家は片付かず 夏休みア、」 夏休み太陽 夏休み腕白の名を覚えられ 朱印帖持つて暑休をうろちょろし 夏休みプラン計りで消えて行き 族はよそのお子 に近く手術に来 白没盛夏 柳食 子子児生 よしを 蕗夏ハ桃春 カナ 児生子村巣 春方史草猫弘無 維正葉右柳

111 柳 会 (大阪市) 麻生路郎先生

選

落ちてもノーコンクールあさらめず カーテンに独身のかげ細くゆれ

高 4 俊

義理だけは果すつもりの羽織を着 星祭天にも地にも恋があり グラビヤへらちわ姿のパリの 沙時も妥協しあらへんヒス 約束も義理も立てたい別れ道 義理の娘を論す婦警も戻ぐみ 転校の少年素直な帽

吉

いて来ず

雪角維

季節一品料理

江戸前にぎりずし

アベノ橋地下映画食通街

郎二歩山宗声志霧

飯にらみとうへ指摸も手が出せず はずかしい月にカーテン閉めに立 天の川逢い引き場所はどのあたり

平男里

テリー

真劔な顔すりゃする程籔にらみ

花提げてわたしはシャンという姿

初恋だったと他の妻君まごっかせ 手さえふれず初恋 胸毛が自慢すぐに裸になりたがり 裸になってもまれて来いと里の親 新家庭時計ばかりが気にかかり 何時来でも留守ばかりでり新家庭 新家庭恐いくと鍵をかけ 初恋もなく大学で首席 素はだかになってどぎらかかくつもり は淡く消え な b とし代 太希志 比呂史 珊枝郎 端 哲 茶 JIJ

> 句 会 (富田林市)

レインコートやつき買えたら梅雨 うちあけるだけの度胸も無い彼氏

が明

里

0

店

十夕の日だのに離婚成 見ていると知らずカーテン明いたまま ボンと胸叩いて俺にまかしとけ 度胸だけあっても女つ

寸.

BRI 部柳 太 里 晶 吉

> 発表 締切 ★大万川柳(第六十八回)を募る 投句 兼題「鉛筆」路郎先生選 大万川柳会宛

報

十 月二十一日(唐四編示)・ 阿倍野区松崎町三丁目

佐師公文化部本林川柳公会員の旧画西公員のが共口新四のお祝 八月十九日の日曜に中島生々郷医博の新暑(諏訪の森)で南区 夜は二日養の後りを帰した(左から三人日四人目が生々騰夫妻) 酒 供 逐

原稿をお願いした方は

かくく好評である。

第一潮花氏も相当に疲

遠隔すぎたり今一ト息 家もあるが、地理的に

という作家もあるし、

れたことと思うので、

て随分賑やか 七十余名集 で催された。

出来るだけ早く寄稿す

他日又、続女流作家訪



記

燈火親しむの候と云う た。流行というものは を散見するようになっ よらな誌面を持つ柳誌 われて□□の□□□の 柳にもその影響があら もまことにふさわしい 近ごろはボナンザグラ きたいものである。★ んいい句を残してお シーズンとなる。せい ので、読書にも、作句に ツ夜が長くなってゆく い感じがする。ボツボ と読書子にはあたたか ★古い言葉ではあるが の大流行だが、川 思う。潮花氏を煩わし いたい。 号で丁度二十名になる 多いのでたのもしいと るように御協力が願 のでこれで一ト先ず打 も大変好評だったが本 ていた女流作家訪問記 田地区などは若い人が ではなさそうだ。岸和 百名になるのは遠い話 た。この調子では二三 の会も丸尾潮花氏の肝 である。★川雑婦人友 百人にお願いする予定 は全国各地の有名作家 入りで百名を越して来 今のところで

> 暫くお待ち願います。 重にやっているので今 いものを出したいと慎 たが、あとで悔いのな 思う。大変おまたせし そう長いことはないと 取になったので、もう よく編集にかかる段 の時日は要するが、い 参加させるこめに多少 た人たちのものを蒐集 名と戦災で作品を焼い 名作家で物故した約十 ホッとしている。さだ 漸く出句者の句の全部 として刊行することに おりたような気がして の選を終り、肩の荷が なり一年有半を費して 集「私達」を私の選集 柳不朽洞会の会員の句 とした訳である。★川 問記を書いてもらら事

伯が二科の会 不二家の三階 質の焦りが九 たのでその祝 カットを描い

月十四日の

切ることにした。まだ

てもらいたい多くの作

(インターピュー

友に推挙され

る池田正三画 てもらってい ★本誌の巻頭ページの

れからいつもの会があ 文芸講演会がある。そ レンブルグ夫妻招請の 下旬にはソ連作家のエ けなければならない。 あるので前日から出か その日の午後には読売 十周年記念川柳大会が 日には川雑出雲支部三 福していい訳である。 されたころのことを思 族」で二科の会友に推 出層重が「N氏の家 学講演会がある。十四 文学連盟主催の短詩文 新聞の講堂で関西短詩 社の仲秋句会がある。 ★十月七日の夕から本 から大阪人はウンと祝 画伯は商業美術である 頃のことである。池田 いおこした。大正四年 雪」の同人だった小 する。せんは編輯局 ていただきたい。掲 写真などは説明をつけ 句会や句碑や川柳人の 川柳に限ることならな 筆でも、句会のことで から、作品の発表だけ 便だけではすきないか 誌面や、同一の句会で 改号されたい。同一 んでも寄せられたい。 も個人消息でも、こと でなく、柳論でも、 も皆さんの柳誌である の、句の発表に単に不 れたら、なるべく早く がかなりある。気づか ある。★同じ雅号の方 の仕事と社の雑用 原稿書きと選句と揮毫 るし、その間を縫うて 任のこと(路) ★本誌は何処きで

随

逸菊浜桜尾布石北丸黒正石大吉 前藤白三市築川西宮井大三內古高寺量 見沢田川崎施井川尾川本曾西田賣山本砂鴨岡山村垣田上阪輪藤川 灯松米不方筑面春潮紫水民八水 北满旋美時夢好錦不湧形晚一花一鋭 海年風笑舟起郎風二三水翠郎麗下々 蝶子栞

岸太森友上間阿林長西飯富山亀小野山吉大小小佐国增杉吉弘水尼新福木武德小清 田下淵田島方野野辻降岡根山林本口田鶴西沢野弘田 谷田津谷綠川田下部永川水 南良愛貴奉丹万甦井竹白淡白晴文吞秋斜喜無史卜半耕湖井柳竹之博妄幽香雅恒柳 柳子論山柳子的光蛙青香舟星峯月水花水由鬼葉占休民山堂慶莊助也夢王林美明子 田木山水山山益田河华黑安吉石阿浜大有足若桑長大服家西青樱福姫黄田河西直松 垣村本本田田永中村田木 岡形川 形畑 西働 立林 原 谷 森 部 本 彈枝花流一胡迷芳春草痴三句九富わ遊夏鉄夕美尋日花面 大容光尽荘養女排川哲正郎女洞杉蝶窓仙雄右園司楽平至を星六児鐘秋四満村山里 糯糕浜小津木海平藤松竹小後 佐森 村永 馬 松 真本 下 稲 岡 臼 政 中 岡 田 椙 水 福 八 木 野 那 本本野西田口野尾井村內池藤野本上田場川鍋田山葉村井田谷田村原谷田木村村谷麦比太 男春童々楼峰史志日古三お志水子る子生的飄朗潮花耕坊介坊潮波善水路郎堂平郎 池新笹戸近大金野津松深佐長船酒岩不志坂伊木多川清山神永菊野永藤小高若吾森高 田岡野田藤橋井村秋下見藤尾曳井崎田水田達村胡端水川谷藤田田松井原橋本郷回旭 回旭 古天泉喜青遊交初六一雅代越呑か一三礼洋堰十春鬼望阿九弥さ身岸明下操久鈴文雄 心子子楽柳子秋甫花楼堂春鳥張平伸夫司男子悟洋酔峰茶郎平む郎子朗柳子志人夫声

飯野中吉児八谷小黄野中明建有安杉中松辻西阿寺平和酒西吉 伊武 早小 勝 三善土石川 田々島村島杉口島瀬口島神沼友部本松岡 田部元井田田田岡藤部川倉谷村木井居口 乃口と 与 文美し凡呂風苦斗木迷可耕之玲立辰恒滄圭宏太句井志清一草茶若清と川風千雷高秋 夫舟代骨志車暴志人羊十生介羊美一雄浪水子郎朗平子子榮白仏菜生ち児子鳥山志香

printed in Japan

行印砌人 編集被飛 川列 号 年年年年 定雜每 価誌言 生 月十五日印刷 (送料四円) 月月 幸 第十一号卷行 投稿規定 ・投句は各種必ず別紙に認め、 所氏名雅号を朗記する事。 所氏名雅号を明記する事。 ・『近作柳樽』は一般作家の雑 を募る。 ・『課題吟』は誰でも投句が出る。 の投句は不朽洞・ 住

B

文章(評論·研究

(年月以内)床 (年月以内)床 (年月以内)床 其生川生 郎巢郎

銀名 (廿旬以内) (井甸以内) 大下 大 若川

題吟募集

集

募

THE SENRYU ZASSHI

NO · 3 5 3

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.







of the 綿 製の生か 造仕地 变立 \$ 3 を門で

●布団の生地は何千反でも揃う●大阪府下どんな山奥でも無料配達します

天王寺駅(阿倍野駅)前スグ北半丁 電話 回 8 2 7 6 工場 図 7 8 2 3

著明そ過的詩も絶川 者快のしで型ろ叫柳 がに作いあいが・は

・嗚咽――そういかかにしてであると共りが本書であると共りが本書であると共りがあると共りがあると共りがあると共りがあると共りがあると共りがあると共りが本書である。 柳 雑 る一以か発にと 工を最も、生に革に、 人上 誌 たもろ

社

取

次

JII

麻 生 路 郎 先生著 何

か 送価 三五 四円

も経新短

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

柳 円四料送 圓 拾 五 價 定 111 號三五三第